

ラストーン

～失われた都より～

9

segakiyui

1. 『氷の双宮』

アシャの腕の中のユーノは、浅くせわしい呼吸を続けている。ぼんやりと半開きになった瞳は虚ろな色をたたえて、どこか遠くを見つめたままだ。

全てを拒み、全てを投げ出す終末の色。

アシャが何度も向き合ってきた、濃厚な死の気配。

「ユーノ」

「...」

びくっとユーノの体が緊張する。微かに繋がる命の糸を切らないように、アシャは低い声で続けた。

「いい。答えなくていい」

「.....」

ゆっくりとユーノの体から緊張が抜ける。軽く眼を伏せた幼い顔に、額から汗が伝わって流れ落ちた。

あの空き家からはそれほど遠くないはずの『氷の双宮』が、いつもより数倍遠くに感じられる。歩いても歩いても、石畳は夜の彼方へと続き、『氷の双宮』の真っ白な壁は見えてこなかった。反比例するように、腕の中の娘の命は刻一刻と削られ、肉体がただの物と化す重みが増してきた。

「ユーノ」

「.....」

やや遅れて、体が緊張を返す。

(さっきより反応が鈍い)

きりっ、とアシャの歯が鳴った。

歩きながら間隔をはかってユーノに呼びかけ、反応を見ていた。始めは微かに首を頷かせていたのが、数回前から僅かに体を緊張させるだけになり、その反応も呼びかけから次第に間隔が空くようになってきている。

「ちっ」

ねっとり片腕を濡らすものにも、アシャは舌打ちした。

右肩の止血ができていない。かなり大きな血管、たぶん一本は動脈を破っていたから、包帯が役に立たなかった。縛り上げて圧迫するにも広範囲すぎる。それでなくとも、コクラノの槍傷でぼろぼろになっていた血管は、十分に回復しきっていない。

(おまけに剣を捻られて)

歯噛みするような思いで荒々しく考える。単に傷を貫くだけならまだしも、貫いた上で手元で剣を捻っていた傷、ショック死していなかったのが不思議なぐらいだ。

(そのまま、あんなところに運ばれて、放っておかれて)

激情が突き上げてきて歯を食いしばる。体は熱いのに、中を流れる血液が冷えて重くてどろどろと濁っていくような気がする。

あの家でよくもセータ・ルムを屠らなかった。自制する気はさらさらなかった。セータの命なぞゴミとしか感じなかった。

だが、あそこで殺してしまっただけは、ひょっとしてまだいるかも知れない裏切り者への手がかりが追えなくなる。最も憎むべき相手、最も責めを追うべき存在を見失ってしまう。

(そしてまた、ユーノが危険に晒される)

ただ、それだけの考えが、アシャの手を止めた。

「！」

ずるりとユーノの腕が滑り落ちて、アシャは我に返った。

「ユーノ」

「.....」

反応がない。

「ユーノ！」

急ぎ足になりながら、声を大きくする。

「ユーノ！」

「う...」

抱え込んで押さえた手に、びくんとユーノが震えた。ふっと瞼が持ち上がる。黒い瞳が彷徨うように虚空を見つめ、やがてゆっくりとアシャを捉えた。

「...」

小さく開いた唇、笑ったか笑わぬかわからないほどの微かな笑みが、汚れた頬に滲む。

「っっ」

胸が詰まって、背筋に恐怖が走り上がる。泣きたいほどの愛おしさと、狂いたいほどの怒りと、それら全てに我を忘れて、彼女の体を抱え込み、ただただ絶叫したくなる。

「く、っ」

眉をしかめ、速度を上げた。

少しでも、少しでも早く、『氷の双宮』へ。

この娘を腕の中で失いたくないなら。

目の前のように、ラズーン中央部、『太皇（スーグ）』おさめる『氷の双宮』を囲む、白い壁が見えてきつつある。

「イルファ！」

ミダス公邸には、明々と光が灯っていた。慌ただしく、白銀の武具をつけた『銀羽根』が出入りしている。

入り口に馬を止めたイルファに向かって、転がるように駆けて来たレスファートは、必死の面持ちでイルファを見上げた。

「ユーノは?! アシャは?! ねえ、ユーノは?! ユーノは?!」

矢継ぎ早に切羽詰まった声で尋ねる。

「『氷の双宮』だ」

イルファは顔をしかめたまま馬から降り、気を失っているセータを引きずり降ろした。がっしりした肩に荷物のように担ぎ上げ、歩き出す。

「『氷の双宮』？」

「ああ」

イルファはむっつりと頷いて、ためらいがちにレスファートに言い渡した。

「アシャから伝言だ。『ユーノを追うな』と」

「え...」

イルファは立ち竦んで、澄んだアクアマリンの瞳でイルファを見返した。

「ユーノを...追うな...？」

鋭い光が、二度三度、その目を過っていく。そして突然、或いはイルファの心を捉えたのか、少年はことばの意味を理解した。

じわっと滲んでくる涙に唇を嘸む。

「そう、なの...？」

掠れた声が問いかける。

「ユーノが...ユーノが...」

光の粒が次々と滑らかな頬を伝わっていく。泣きじゃくり、大声で詰られるか、この前のように周囲から心を閉ざしてしまうかと案じていたイルファはほっとして、レスファートの頭の手を載せた。そっと出て来た方向へ押しやる。

「さ、入ろう。俺にはもう少し仕事がある」

「...ひっ」

レスファートがしゃくりあげる。

「イルファ.....ユーノは.....どうしたの？」

青ざめた顔に強張った表情を浮かべて、入り口に立ち竦んでいたリディノが、何とかしつかりしようとするようにこぶしを握りしめて問いかけてくる。

「それは.....視察官（オペ）セータ...」

リディノの背後に立っていたミダス公が、イルファの肩の男を見て、呆然とした顔になった。信じられない様子で、両手を開き、首を振ってイルファを見る。

「一体どうして.....セータが...」

「裏切りですよ」

イルファは苦々しく吐き捨てながら近寄っていく。空き家の床で呼吸を荒げながら、半死半生で横たわっていたユーノの姿が脳裏を過る。胸に不愉快な熱いものが湧き上がってくる。

（女なんだぞ）

アシャの話では、槍傷を抉っていると聞いた。

（女苛めて、何が楽しい!）

イルファにしてみれば、女は時に扱いづらい存在だが、男の楽しみであり喜びだ。ユーノは確かに、

いささかその範疇から外れてはいるが、剣の腕には一目置いているし、思い切りのよさ、妙なところに固執してぐちゃぐちゃ言わないあたり、女を越えた部分でも気に入っている。

「それを.....どうして...」

ミダス公のことばに、イルファは苛立って相手のどこか曖昧な顔を睨んだ。

「こいつがギヌアって奴と組んで、ユーノを襲ったんですよ。視察官（オペ）の中に裏切り者がいるっていうんで、アシャが網を張ったのに引っ掛かったんです」

「『氷のアシャ』...」

ミダス公はユーノを襲ったのが、他ならぬ視察官（オペ）であるということに少なからずショックを受けたらしく、ますます強張った顔で続けた。

「さすが.....ですな」

「それで、ユーノは？」

華奢な見かけ以上に気丈なところがあるらしい、リディノが白くなった唇を舌で示して、重ねて尋ねる。

「ユーノは...」

イルファはリディノに血生臭い話を聞かせてよいものかどうか、一瞬ためらったが、相手のひたむきな視線に溜め息をついた。

「かなり危ないと思います。.....アシャは...もって二分八分だと」

「っ」

リディノは息を吞んで、口を指で押さえた。たちまち、薄緑の淡い瞳からぼろぼろと涙を零す。

「ユーノ...」

「それほど、か」

ふいに老け込んだように、ミダス公が呟いた。

「それで.....アシャは今どこに」

「ユ...ユーノ...」

しゃくりあげるレスファートにリディノがそっと手を伸ばし、小さな肩を引き寄せる。涙で溢れる眼で、レスファートは同じように涙ぐんでいるリディノを見上げる。

「レス...」

リディノが囁いて、抛り所を求めるようにレスファートを抱き締めた。ぐ、っと一瞬詰まったレスファートがわっと泣き出し、リディノの首にしがみつく。お互いの悲しみを抱え合うように泣き始める二人を見下ろし、イルファは重苦しく唸った。

「アシャは今、『氷の双宮』に向かっています。.....そこならあいつを...ユーノを助けられるかも知れないと」

「『氷の双宮』に...」

ミダス公は畏怖を込めた声で繰り返し、闇の彼方に目をやった。

そびえ立つ白く滑らかな壁は、侵入者を冷たく拒んでいた。

『氷の双宮』。

ラズーン統合府の頂点『太皇（スーグ）』の直轄地、言わばラズーンの謎を全て含んでいる地である。

その壁に、アシャは傷ついたユーノを抱き上げたまま、向き合っている。

「ユーノ？」

風に混じるような低い囁きに、ユーノは目を開けない。が、微かに緊張を取り戻す体が、彼女の命を何とか繋ぎ得ていることを教えていた。だらりと下がった指先の先から、ポトポトと音を立てて血が滴る。振り向けば、来た道に点々と血の跡が続いているのだろうが、アシャは振り向かなかった。

じっと、目の前の、見事な浮き彫りの施された扉を見つめる。

二人並んで入るのがぎりぎりの、小さな扉だった。

門兵は夜でも外に居なかったが、その扉が並の人間には開けられないことを、アシャは熟知している。内から開けることができるだけで、外からはまず開くことはできない。

「...」

自分の瞳に閃光が走ったような感覚があった。体の輪郭がぼやけるように一瞬揺らぎ、じわじわと金色のオーラが滲み出てアシャを包んでいく。皮膚の表面に高エネルギーが発するちりちりとした波動を感じる。オーラは、アシャ自らを侵食する前にふいに翻った。外へと広がってあたりの闇を払っていき、眩く煌めく金の粉のような光を振りまいていく。

やがて上下左右に十分に広がり、密度を増したオーラが、触手のように一方に伸び始めた。白い扉に生き物のように忍び寄り、触れ、何かを確かめるように表面を撫で摩り、続いて密度の濃い輝きを、次第にもっと華やかで激しい、燃え上がるような黄金の輝きに変えていく。

どれほど時間がたったのだろう、今や扉をぴったりと覆った金のオーラが、何ものかに押し縮められたように濃度を増し、凝縮した。ぎらぎらと光る猛々しい色になって、まるで古くからの呪文で閉ざされた扉を破るように、扉を内側へと押し広げ始める。

アシャの視界は輝く黄金の光に呼応するように、白銀の炎が躍りのたうっていた。炎が爆ぜる、その続け様の爆発を見つめているように光輝に満たされる。

この夜に、アシャの姿を見た者が居るとすれば、彼はきっと、ラズーンの性のない神を見たときと触れて回ることだろう。金のオーラに包まれ、金褐色の髪を逆立たせ、紫の目は炎を映して見開かれ、上気した頬に呼応する紅の口に、凄まじい笑みを浮かべている鬼神であった、手に抱いた少年とも少女ともつかぬ幼き者を、その生贄として攫ってきたばかりのようであったよ、と。

「...」

つう、とアシャの額から一筋の汗が流れ落ちた。

ぎりぎり無理矢理に広げられていく扉が、ようよう一人が通れるほどの隙間を作る。オーラが絡み付き、扉に沿って滴り落ち、扉を開いたままの場所で固定する。

アシャは歩き出した。眠っている子どもを起こすまいとするような、忍びやかな足取りで扉の間を擦り抜ける。

「う...」

ユーノが小さく身動きして、顔を背けた。はあっ...はあっ...と、途切れそうになっては続く儂い呼吸に抗うように、胸が大きく上下している。

労るようにならぬアシャは、壁の中に入ってしまうと、オーラを消した。吹き上がるときは時間がかかったが、一瞬にして自分の体に吸い込まれて消える金色の光、背後で音もなく開かれていた扉が閉じる。

もし、多大な期待を持って、この壁の中を覗き込んだ者が居たとしても、それはあっさりと裏切られただろう。

そこには、妙な形の建物も尖塔も、不思議な色合いの石も異形の樹木もなかった。壁の外とほとんど変わらぬ石畳は、出入りが少ないせいか、ひどく艶やかで光沢があったが、それ以外は全く当たり前の、ごく自然な景色だ。

正面に清らかな水に円弧を描かせる噴水がある。滑らかで美しい曲線で水を噴き出し続け、涼しげな風を起こすとともに、爽やかな水の匂いを周囲の空気に満たしている。

『泉』

ラズーンの象徴だ。

その円形の噴水を取り巻き、壁の内側に沿うように、外と似たような街並が続いていた。素材は石

畳と同じような白っぽい石、ものによっては桜色がかったり、水色がかったりしているが、大抵は純白に近い白さを保っている。

街並が極まる先に、どっしりとした巨石によって造られた宮殿があった。それも二つ、上空から見下ろせば、ほぼ正方形の、壁一面に溢れ逆巻く水の流れを浮き彫りにした、同じ作りの宮殿が、視界の端と端に、まるでお互いがお互いを鏡とするかのように建っている。

ラズーンの『氷の双宮』。

『銀の王族』が集められる所だ。

もし、この街におかしなことがあるとすれば、それは余りにも人の気配がないことだった。夜とは言え、そして家々には明かりが灯っているものがあるというのに、人の持つ生命力の息吹が全く感じられない。

それを見て取ったアシャは憂いを込めて目を細めた。

この奇妙な静けさは、言い換えればラズーンが二百年祭を迎えて、その生命を失いかけていることの暗示でもあった。

(枯れてしまった『泉』)

ラズーンは、死に絶えようとする世界を、何とか生き返らせようとする大いなる『泉』であった。しかし、それを保つ努力は困難であり、二百年を迎えるごとに、ラズーンはその活力を失いかけた。

その『泉』を復活させるためには、呼び水が必要だった、『銀の王族』という、生きた、活力に満ちた水が。

アシャが居た頃は、ここはまだ活力の源だった。今夜のアシャのような闖入者をそのまま捨て置くことはなく、すぐに門兵が現れたものだ。

だからこそ、アシャは視察官（オペ）として諸国を巡ることを望み、この国を出ても大丈夫だと思ったのだ。

「...」

しばらく佇んでいたアシャは、首を振って歩き出した。今はそんな感傷に浸っているときではない。

急ぎ足で噴水を回り、『氷の双宮』の右の宮へ向かう。長い間、誰も歩かなかった石畳を踏み、階段を数段上がり、巨大な柱の間を通り抜け、右の宮の扉の前に立つ。アシャの目が再び光を帯びる前に、扉はゆっくりと内側に開いた。

「ふ...」

アシャは、思わず安堵の笑みを漏らした。慣れ親しんだ場所、怯むこともなく建物の中に入っていく。

一転、建物の中には、真昼のように煌煌と明かりが灯っていた。窓のない壁面には、外側と同じように、溢れ乱れる水の流れが浮き彫りされている。

宮の中の明るさの光源はどこからとも判別つかない。火皿らしいものも、松明も見当たらない。強いて言うなら、壁そのものが光っているように見える。

アシャはためらうことなくまっすぐ柱廊を進み、奥へ奥へと入っていった。外側から見ると、それほど大きさがあるとは思えなかったが、アシャの脚でも奥へ突き当たるには時間がかかる。高い天井、眩い視界、光の中を歩み続ける不安定さ、床の上に点々と滴った血は、誰が拭き取ることもないのに、しばらくすると自然に薄れ消えていく。

いや、この宮の中だけではない。ラズーンの内壁の中で、あの石畳に落ちた血痕も、今頃は跡形もなく消えていっているだろう。なぜなら、白っぽい石と見えたものは、石のように見えるが石ではない、異質な物質だから。

アシャは奥の玉座に辿り着くと、左右に垂れ下がっている真紅の光沢のある布を見つめた。ゆっくり右の布の後ろへ回る。裏には小さな窪みがあった。ちょうど布で隠れるような、人が三人ほど立ってられる空間だ。

アシャはそこに入り込み、ユーノをそっと抱き直した。呼吸はさっきよりもなお微かになってきている。心臓の鼓動が弱くなっているような気がする。青ざめた額には玉のような汗がびっしりと浮かんでいて、少し開いた白い唇が震えながら弱々しく空気を求めている。

「ユーノ」

「...」

「ユーノ！」

「...」

反応はなかった。急がなくてはならない。

アシャはユーノを抱えたまま、背中から壁にもたれた。すうっと体が下降するような妙な感覚、窪みがいきなり下へ沈み、目の前で床が競り上がっていく。

下降する感覚が続いたのはわずかだった。ふ、っと浮遊感が消えるとともに、体の重みが戻ってくるともう、アシャは妙に飾り気のない、四角い部屋に居た。

「.....」

今まで乗っていた窪みから降り、部屋に脚を踏み出す。背後で窪みが再び音もなく上がっていく。それを無視して、アシャは歩き出した。

部屋は金属の箱のようだった。つるりとした信じられないほど凹凸のない壁、同じく傷一つない滑らかな天井、床は上の階よりなお一層独特の光沢をもって発光し、中央には水のように透過した球体が、細い金属の三本の脚に支えられて浮いている。導師の持つ水晶に似ていなくもなかったが、目を凝らして中心を見ようとすると、もやもやとしたものに目をそらされて、どうにもはっきり見えない代物だった。

アシャは透明な球体の前を横切り、右端、縦長に口を開いている空間へ向かう。脚を踏み入れたとたん、ぱっと部屋が明るくなった。

その部屋は奇妙な部屋だった。

水晶の水槽のようなものが五つ、等間隔に置かれた鈍い銀色のベッドの上に乗せられている。水槽の一つ一つにいろいろな線が繋がり、入った正面の壁一杯に広がる金属の壁に接続している。壁には揺れる針や上下する色とりどりの棒、幾つものボタンと奇妙な形の取っ手、明滅する球体や立方体などがはめ込まれている。

水槽はどれも空だったが、それぞれに淡い水色の液体をなみなみとたたえており、時々銀色の泡がぶくぶくと浮かび上がり躍っている。

「.....」

アシャは黙々と近くのベッドに近寄った。しゃがみ込み、膝にユーノの体をもたせかける。ボタンを押して、水槽の蓋を開ける。中に沈んでいた、管のついた透明な歪んだ半球形のものを引っ張り出し、他のボタンを押す。と、管の中を白銀に光るものが移動して、半球形の中に溢れ、満ちていた水を押しのけた。

シュウシュウと攻撃に移ろうとする蛇、ヤルンゴのような音をたてる『マスク』を、アシャは静かにユーノの口に当て、端についていたベルトで留めた。ちょうど、ユーノの口元を、その『マスク』が覆う状態になる。

「は...ふっ...」

今にも途切れそうになっていたユーノの呼吸が、ふいに目覚めたように大きくなった。胸が何かに押し上げられるようにゆっくり上下し始める。真っ青になっていた頬に微かに赤みがさしてくる。

「...よし...」

小さく吐いて、アシャは再びユーノを抱き上げ、そっとその水槽の中へ入れた。溢れるかと思われた水は波打ちながら水位を下げる。普通の水ではないのだろう、びくりと体を震わせたユーノは、底まで沈むこともなく、ふんわりと中程に浮いている。『マスク』の中に水は入り込まない。ぼんやり見開かれていたユーノの目が、水色の液体越しにアシャを見つめたが、再び眠たげに閉じられる。

「.....」

アシャは水槽の蓋を閉め、壁の計器とベッドの計器をチェックした。

(うまく行って、助かる率は二割...)

ラズーンの最新設備でそうなのだから、後は神に祈るしかない。

「は...あっ」

重く深い息を吐いてベッドに手をついた。緊張がなくなったわけではない、打つべき手がこれ以上ない、その苛立ちがアシャの心身を憔悴させている。

「っ」

突然背後に気配を感じ、アシャは体を起こして振り返った。

いつの間にか、入り口に一人の老人が立っている。白い長衣、白い髪に長く長い髭を垂らし、肩に真白のクフィラを止まらせている。

「久しぶりじゃな、アシャ・ラズーン。我が息子よ」

「『太皇（スーグ）』.....」

アシャは低い声で応じた。

(どうして、ユーノは帰ってこない?)

レスファートは窓に腰掛けたまま、そっと外に手を伸ばした。指先に、尾の長い鳴き鳥(メール)が止まりに来る。

(好きだっていったのに)

レスファートは心の中で呟いて、その手を引き寄せた。リリッ、リリリュッ...とさえずり続ける鳴き鳥(メール)に唇を寄せる。その頭にも肩にも、まるでレスファートを慰めるように次々と鳴き鳥(メール)が舞い降りてくる。

(どうしてユーノは帰ってこない?)

膝に乗った鳴き鳥(メール)の背に、ぼとりと光るものが落ちた。

「リッ！」

鋭い声を上げて鳴き鳥(メール)は驚き、ばたばたと飛び去った。促されたように、レスファートの回りにいた鳴き鳥(メール)が一斉に飛び立っていく。

「あ！」

行かないで。

手を伸ばしたレスファートの体がぐらりと前へのめった。

「レス...きやつ!!」

「わ！」

窓から落ちかけたレスファートを背後から抱きとめ、リディノがほうっと息を吐く。

「危なかったわね.....だめよ、こんな所に座って...」

優しくたしなめかけたリディノが、振り向いたレスファートの目が涙で一杯だったのに驚いたのだろう、口を嚙む。

「泣いてたの? レス」

柔らかな問いに、より心が緩む。

「.....ユーノが帰ってこない...」

訴えると、開いたままの目から涙が溢れ落ちた。

「もう三日もたってるのに...」

「レス...」

リディノはそっとレスファートを抱き降ろし、一緒にしゃがみ込む。

「大丈夫よ」

「.....ぼくに.....追うなって.....ぼく.....ユーノのそばにいたい...」

大声で泣き出しそうなのを必死にこらえる。心の中に空洞ができる。それが恐ろしい早さでどんどん広がっていくのを、震えながら何とか食い止めようとしてまくしたてる。

「ぼく.....ユーノのそばにいたい! はなれてるの、いやなの! ユーノ、あきらめるのいやなの!

ユーノ死んじやったら.....死んじやったら.....」

零れそうになることばを下唇を噛んで押しとどめ、黙り込む。だが、圧力は強い。黒くて重い不安がたれ込めて来る雲のように心を覆い、竦むレスファートを呑み込んでいく。がっかりと肩を落とした。

「ぼく.....いくところ...ない...」

「レス.....レス...」

痛々しいという風情で、リディノがレスファートを引き寄せた。椅子に座り、抱え上げ、膝に引き上げてくれる。何度も頭を撫でてくれる。

「大丈夫よ。アシャ兄だまが一緒なもの。アシャ兄さまが.....ね、レス」

「アシャが...」

レスファートはぐっと息を引き、呑み込んだ。

そうだ、どうしてそれを忘れていたのだろうか。

「うん...そうだ。アシャの側だったら、ユーノ、楽なんだ」

思い出すと少し元気が出た。にっこり、頑張っって笑ってみせる。

「胸が痛くなってもいいんだ」

「え？」

ふ、とりディノが眉を寄せた。少しためらいながら、そっとことばを継ぐ。

「レス.....あなた、人の心がわかるのよね」

「うん...すこし」

ふいに気配の変わった相手にレスファートは戸惑う。
「ユーノはアシャを好きなの？」
「.....よく.....わかんない...」
ユーノが大丈夫かどうかという話が、なぜユーノがアシャを好きかどうかにかかわらなくて、首を傾げた。
「でも.....アシャは...」
ユーノはどう言っていたっけ、と一所懸命に思い出す。
「レアナって言う人を好きなんだって」
「レアナ？」
リディノの声が妙に強くなったように感じる。
「うん...それで、ユーノが痛いのに」
問われている内容がよくわからないが、それでもユーノの胸が痛くなることから話は始まったはずだから、と急いで付け加える。
「でも、アシャといくと、あったかかって」
「レアナ.....あ」
リディノははっとしたようだ。
「セレドのレアナ？.....セレドの第一皇女.....だから...ユーノ...」
リディノは眉を潜め、切ない表情になったが、次にはもっと厳しい、苦しげな顔になった。
「そう.....アシャ兄さまは.....レアナが.....」
「リディ？ どうしたの？」
リディノの心がふいに滲んだように揺らめくのをレスファートは感じ取った。鮮やかで華やかな印象が、あつという間に雨に打たれた花が散るように乱れていくのに不安になる。
そのレスファートをきゅっと抱き締め、リディノは巻き毛を揺らして首を振った。
「何でもない...何でもないのよ、レス...」
瞳を堅く閉じた意志を裏切って、光るものが溢れ、リディノの頬を伝うのを、レスファートは呆然と見つめた。

「『氷の双宮』については...」
席を立ったミダス公が、窓に近寄りながら続けた。
「私達も詳しくは知らないのです」
「どうしてですか？ あなたはラズーンの四大公でしょう？」
ついさっきまで旺盛な食欲を満たしていたイルファは、今はゆったりと椅子の背にもたれながら、ミダス公に問う。
「確かに、私は、ジーフォ公、アギャン公、セシ公と並ぶ、ラズーン四大公の一人です。しかし、だからと言って、ラズーンの全てを知っているわけではない」
ミダス公は窓辺でくると振り返った。背後からの光を受けて、プラチナがかかった金髪がきらきらと光輪のように輝いている。その光の中心あたりから声が続く。
「ラズーンがどうして、この世界の統合府となったのか、どうして我ら四人が大公の位を与えられ、今日に至っているのか.....恥ずかしいことだが、全く知らないのです。私は父祖より与えられた地位を受け継いだのみであるし、おそらく、他の三人も同様でしょう」
「知らない？」
腹が膨れたせいか、やや眠たげな目になっていたイルファは、思わず瞬きした。
「そいつあ、面白い。なら、あなた方は、ラズーンでどんな役目を担っているんです」
仮にも分領地の長に対してあまりにも不躰な物言いだったが、ミダス公は気を悪くした様子もなく、笑みを浮かべて席に戻ってきた。
「そう...私達がしていることは、主として自らの分領地の管理、ですね」
応えながら、ミダス公は、卓に置かれていた複雑な形の木の小槌を、その下の平たい木の板に叩き付ける。コーン、と張りのある音を通して、入ってきた男女が次々と卓の上の皿や残り物を片付けていく。
もう少し腹に余裕があれば食べ切るところだが、さすがのイルファもこれ以上は入らない。残念な気持ちを隠し切れず、名残惜しく見送っていると、まだ必要だろうと思われたのか、木鉢に盛ったラクシュの実と、ほの明るい紅の酒を注いだコップが残された。早速手を伸ばし、一つ二つ、ラクシュの実を口の中に放り込んで噛み砕きながら、イルファは重ねて尋ねる。
「分領地の管理.....領主、ということですか？」
「その通りです」

ミダス公はじっと酒の色を確かめるように、コップを見つめた。

「時々、『太皇（スーグ）』よりお召しがあって、『氷の双宮』へ向かいます。普段は外からは開かぬ扉ですが、その時だけは押すと開きます。もっとも、どういう仕掛けなのか、私達四大公、それに視察官（オベ）以外では、あの扉は開かないのです」

一息ついて、ミダス公は酒を含み、ラクシュの黒い小さな実を摘んだ。

「中に入り、『氷の双宮』の左の宮で『太皇（スーグ）』に謁見を賜り、時には四大公でお互いの掟や領地での出来事について話し合います……それだけです」

最後のことばに微かな疲れが滲んだ。

「全体の施政は？ どう管理されているんです？」

大食漢で無遠慮な男ではあるが、伊達にレクスファで王の側にいたわけではない、思ったよりも曖昧な仕組みに、イルファはのんびりと問いかける。

「全体？」

「ああ、ラズーン全体の。そもそも、ラズーンは世の統合府ですよ。世界はどうやって統治されているんですか？」

イルファ達末端の人間が知っているのは、自分達の国々のことだ。ラズーンは世界の様々な出来事についてほとんど干渉しない。時にカザドのような無法な動きをする国がなくもないが、周囲の国を席卷し、呑み込むようなことにはならない。不穏な動きは静かに穏やかに、燃え盛る炎に少しずつ湿った布が投げ込まれていくように、じりじりと勢いを削られて消えていくのが常、時には内乱のような形で決着がつくこともあるが、時にはよく理由がわからないままに火種がなくなることもある。

だからこそ、ラズーンには秘めた懐刀があり、その役職を担う者が世界に散っており、見えない場所から国々の動きを眺め、よほど世界の安定を揺らがせるようなことがあるなら、その懐刀が動き出す……そういうお伽噺じみた噂が立つのだ。

視察官（オベ）や『運命（リマイン）』のことを知った今となっては、世界の動向を監視するのが視察官（オベ）であり、その補正と安定に力を尽くすのが『運命（リマイン）』だったという想像はつく。今の世界の動乱が、その『運命（リマイン）』の造反、本来ならばラズーンを継ぐ王子達、アシャやギヌア達の職務の放棄が重なったため、そう考えるのも辻褄があう。

だが、それだけでは説明のつかないこともある。

太古生物と呼ばれる数々の魔物（パルク）がなぜこれほど復活しているのか。

なぜこの動乱に対して、ラズーンは軍を繰り出したり視察官（オベ）を再配置したりして統治を強めるのではなく、各国から忠誠を証する者を集めるなどという、あやふやで意味のなさそうな策を採ったのか。

しかもこの四大公、『羽根』と呼ばれる精鋭らしき軍を備えながら、なぜ世界の混乱に動こうとせず、どちらかというひたすらにラズーンの守りを固めるかのように動かないのはなぜか。

ならば、それだけ守らなくてはならないラズーンとは、そもそも何なのか。光と影の統治方法をうまく動かしている大きな国、それだけなのか。それとも、何かもっと別の、意味を含んだ存在なのか。

イルファの何げなさそうな問いには、もっと大きな何かがあるのではないのか、そういう揶揄も含んでいる。

「……『太皇（スーグ）』は指示を与えられます。それにより、ラズーンをまとめられています。以前はかなり強く指示されることもあったと聞きますが、最近では『運命（リマイン）』の暗躍もあり、それほどはっきりした指示がでるわけではありません。それに……」

ミダス公はカリッと音をたてて、ラクシュを囁んだ。

「ラズーン全体がこの世を治めているわけではないのです。ラズーンの中で、私達四大公の分領地一つ一つは、諸国の一つ一つと同様、ラズーンという名を持つ諸国の一つに過ぎない、とも言えます。……『太皇（スーグ）』が治めている内壁の中こそが、ラズーンの中のラズーンなのです」

「……」

イルファは酒を呷った。

ミダス公のことばは多くを語っているようだが、その実、ほとんど重要なことについて語っていない。それはミダス公自身が本当によくわかっていないのか、それともイルファに話すべきではないと思っているのか。

「視察官（オベ）はどのような位置にあるのですか」

「ああ……」

ミダス公は穏やかな微笑を返してきた。

「彼らこそが『太皇（スーグ）』の直属の配下と言えるでしょう。彼らは四大公の誰にも属さない『中間者』ですし、私達四大公にとっては、迎え、もてなすべき客、『太皇（スーグ）』からの使者でもあります。……もっとも、『運命（リマイン）』が造反するまでは、彼らもあまり楽しくはない相手ではありますが、密使であり、客でした」

「え？」

イルファはミダス公の顔を見直した。

「ってえと、あいつらもここに来たことがある？ あなたが客として遇したことがあるということですか？」

「『運命（リマイン）』はラズーンの重要な部分でした。けれど...」

少しためらい、声を低めて続ける。

「自分達こそ、この世界を治めるべき存在であると...その資格があるのだとして、『太皇（スーグ）』に反旗を翻したと聞きます」

「仲間割れ...と言えはよくある話だが」

しかし、その自分達にこそ『資格』がある、というのは面白いな、とイルファはごちる。

「『運命（リマイン）』の王だという、ギヌア・ラズーンが言うならわかるんだが」

ギヌアが、自分の力量はアシャより上だ、だからこそ、この世界を統治する権利が自分にある、というのならわかる。しかし『資格』ということばはもっと違う感じがする。

（まるで、自分達の統治が一番自然なこと、そういう感じがするぜ）

だが、現実には彼らに統治は任されていない。その辺りに何かありそうだ。

「そうですね...あの方は彼の名が示す通り、かつての第二正統後継者ですから」

ミダス公の瞳が一瞬翳った。

「ま、どっちにせよ」

イルファはぼん、と放り投げたラクシュの実を掴み、空になった酒のコップに落とした。酒に塗れる黒い実のにやりと笑う。

「あいつらとはぶつかるしかねえ。何せこっちは、アシャの味方につくと決めちゃってますからね」

「...」

ミダス公は曖昧な笑みで応じた。

(ユーノ...)

アシャはじっと、水槽の中に漂っているユーノを見つめた。

水色の栄養液のせいか、肌が透けるほど蒼白く見える。昏々と眠り続けているユーノの右肩には、細胞の再生が行われていることを示す微かな泡がまとわりついている。

だが、その速さは嫌になるほど緩慢で、三日目だというのにまだ半分も蘇生していない。通常の傷ならばとっくに塞がっていていいはずなのに。

(逝ってしまう気か)

まるやかな膨らみの胸が、緩やかに上下するのを見ながら、胸の中で問いかける。呼吸に合わせて僅かに浮き沈みする体は全裸、両手を少し広げ、短い髪が水草のように顔にまとわりつき、アシャの知らなかった傷をも癒している姿はまるで水死した者のように生気がない。

(もう、二度と目を開けない気...か?)

抱き寄せられないのが苦しい。水槽の蓋にすがりつくような自分のみっともなさも意識の外だ。こぶしを握りしめて叩き付けたくなる、自分とユーノを隔てる透明な壁を。

(戻ってくれ)

この装置はそれほど長期のためのものではない。回復力を増強するように調整はされているが、基本になるのは本人の持つ生命力、水中に沈んでいる体への負荷と回復度のバランスを考えてはじき出された期間は五日、後二日と少ししかない。

(戻ってきてくれ.....ユーノ)

脳裏に鮮血の記憶が重なっていく。レクスファでの、ガズラでの、キャサランでの、そしてこともあろうにラズーン、ミダスの領地での。アシャの腕の中で、止め切れずに流れ落ちていく血の生暖かさを、これほどの恐怖で見守ったことなどない。

戻って欲しいとアシャは願う。だが、その戻った体が何に供されるか、アシャは考えまいとしている。

(何のための代償だ)

唇を噛む。眉を寄せる。聞くまでもない。ラズーンを守るために、ユーノの中に植え付けられた力は、あっさりとして死ぬことを選ばなかった、そういうことだ。

(何のための)

世界を守るため.....だが、その世界は、ユーノにこれほどの苦痛を耐えさせるほどの価値があるものなのか?

「アシャ」

「...」

呼びかけられて体を起こし、振り返る。

「またここにおったのか」

「『太皇(スーグ)』...」

老人が近づいてくるのに、アシャは暗く笑った。

「クェアッ！」

相手の肩からふわりとサマルカンドが飛び上がり、沈んでいるアシャの肩に乗り移る。そのまま、気遣うように水槽の中のユーノを覗き込み、クェッ、と小さく怯えたような声をたてた。

「お前にもわかるか？」

滑らかな羽を撫でてやる。

「今の回復率は？」

「...二割弱です」

アシャは『太皇(スーグ)』を振り向いた。

「二日前と状況は変わっていません」

そうわかってしまう自分が情けないと思ったのは初めてだった。

『太皇(スーグ)』は頷き、ゆっくりと白の長衣の裾をさばいて近づいてくると、同じようにユーノを覗き込んだ。

「幼い娘だな」

「はい...回復力も」

あまり望めない、そのことばを口に出せずに嘯み殺す。回復力は少しずつ増してはいる。調整も怠っていない。だが、それを支えてくれる体力がどこまで持ってくれるだろう。疲弊しきっているユーノの体は救急処置が第一選択、栄養を注入しかけたとたんに体液バランスを崩しかけたせいで、十分に

補給できていない。今ユーノは自分の体を食い尽くしながら、傷を治しているようなものだ。

「『銀の王族』じゃな」

「...はい」

重い『太皇（スーグ）』の声に、続くことばを察して、体が震えた。

「この娘を失うわけにはいかないのじゃ」

「は、い」

（俺も同じだ）

叫びそうになるのをアシャは堪える。

（あなたより、いや、他の誰より、俺もユーノを失うわけにはいかない）

「たとえ、この命が終わろうとも」

「っ」

思わず相手を睨み据えてしまった。

「このままでは、この娘は死んでいくのみじゃよ」

「わかっています」

「わしは、ラズーンの『太皇（スーグ）』として、この娘をむざむざ死なせるわけにはいかん」

わかっておろう、と『太皇（スーグ）』は語る。『銀の王族』を回収してくるはずの視察官（オペ）が次々と『運命（リマイン）』の襲撃を受けていることを。

「必要数が欠ける恐れさえあるのじゃ」

「しかし、『太皇（スーグ）』」

「この娘は」

アシャの反論を、『太皇（スーグ）』は一言で封じた。じつとアシャを見つめてくる瞳は暗い灰色、穏やかに、だが反論することを許さない強さでことばを継ぐ。

「この娘は『銀の王族』として、この世に生を受けた。ならば、その務めを果たしてから死ぬのが、摂理というものではないのか？」

「しかし...」

『太皇（スーグ）』のことばは正論だ。この世界は非常にあやふやな力で成り立っている。しかも、『運命（リマイン）』が自らの覇権を望む今、ラズーンの力をこれ以上削るわけにはいかないのもわかる。

「ユーノは今、体力を使い果たしています。こんな状態で『洗礼』を受ければ、それこそ命の保証がありません」

幼い愚かな言い訳だとわかっていた。

「この娘が『銀の王族』の務めを果たさぬまま死ねば、どのようなことが世界を待ち構えているか、ラズーンの名を持つそなたならわかっておろう」

『太皇（スーグ）』は静かに続けた。

「動乱どころではない、ラズーンは崩壊し、世界そのものが一変するじゃろう。今穏やかに暮らしている人々の日々は破壊され荒廃し、この世界をどんなものが支配するのか、想像できるはずじゃ」

「.....」

アシャの脳裏に旅先で出会った多くの人々が蘇る。

たびたび同じ危機はあった、だが、人間やラズーンに憎しみを持つ『運命（リマイン）』の勢力がここまで伸びた二百年祭はない。今ここでユーノに『洗礼』を受けさせずに失うことは、ラズーンだけではない、この世界に現在存在する生命体全ての未来を閉ざすことにもなりかねない。

（だが、今『洗礼』を受けさせれば、ユーノは）

心身ともに弱り切っているユーノの命は確実に保たないだろう。健康な『銀の王族』でも、心の弱いものはそれまでの世界の見え方を一変させられて衝撃を受け、時に元の生活に戻れない場合もある。明かされた真実を、お伽噺のように呑み込める強さも『銀の王族』の特徴のはずだが、ユーノは既に規格外だ、どんな反応を起こすのかわからない。

「世界をその手で滅ぼすのか」

「.....」

『太皇（スーグ）』の問いに答えられないまま、アシャは無言で水槽を離れ、水晶体が輝く部屋を横切り、もう一方の入り口に入った。足を踏み入れたと同時に照明がついたが、ユーノが眠る部屋に比べると遥かに薄暗い光だ。

その陰気な光の中、目が慣れるに従って見えてくる、奇妙な光景をアシャは一つ一つ眺めた。

きらきら光る、ラズーン支配下（ロダ）では見かけない金属の台の上に、透き通った円筒形のものが立てられている。天辺は台と同じような金属の蓋で覆われ、そこから何本ものくねる、滑らかな管が天井へと繋がっている。円筒の中には、薄い黄緑色の液体がたたえられ、思い出したように下方から銀色に光る泡が立ちのぼる。

円筒形の下にある台はかなり大きなもので、つるりと滑らかな表面には何の模様も文字もない。だが、時折、すうっと光が過るような白い色が、表面をちらちらと動きながら流れていくのが見えた。

円筒は、動物の子宮の代用品だ。動物の小さな細胞から新たな命を発芽させ、成長させるための容器、付属している管はそれを管理している機器に繋がっている。二十個以上ある円筒のほとんどは埋まり、液体の中に鳥や動物、そして人間の赤ん坊らしいものまで浮かんでいる。

だが、その半数は、鳴き鳥（メール）や平原竜（タロ）や馬などではなく、クフィラやレガやガジェスなどの、いわゆる太古生物の赤ん坊だった。

「ここまでできていたんですか」

アシャは苦い口調で唸った。

「そうじゃ。もう...半数近くがコントロールを外れておる」

『太皇（スーグ）』は重い口調で返した。

「このままでいけば、我らの滅亡は必至、この世は太古生物の跳梁する闇となり、せつかく根付いた生物は死滅し、やがては太古生物どもも互いを喰い合い、世界は再び死に絶えてしまうじゃろう。...我らにできることは、あらゆる手立てを尽くして『銀の王族』を集め、その『種の記憶』を取り出し、保存し直すことだけじゃ」

老人の声は底知れぬ憂いに満ちている。

アシャは沈黙したまま、もう一步、部屋に踏み込んだ。他の円筒の影になっていた円筒が新たに見える。

「.....」

奥まった、一つだけ色の違う円筒には今何も浮かんでいない。薄黄緑の液体がたゆたゆと揺れ、泡を立ちのぼらせているだけだ。だが、その三つばかり隣の円筒に、人の姿をしたものがふわりふわりと頼りなげに浮いていた。藻草のように揺れる黒髪、半開きになった目の色は紅、おそらく『運命（リメイン）』だろう。

「『運命（リメイン）』が...」

「ああ...おそらくは、我らに齒向かう道を選ぶのじゃろう」

『太皇（スーグ）』の声がまるで聞こえたように、その赤ん坊はぱちりと目を開け、こちらを見つめた。にんまりと禍々しい哄笑を感じさせる笑みを漏らし、再び目を伏せる。

災いを、今のうちに叩き潰すことができたなら。

きっと歴代の『太皇（スーグ）』も、この二百年祭の時に生み出される太古生物を、苛立ちを込めて見つめたことだろう。

だが、この装置そのものをアシャ達が扱う術はない。伝わっているのは、ほんの簡単な操作でしかなく、生み出された存在がどのように世界に放たれているのかさえわからないのだ。

わかっているのは、この装置がなければ、十分な繁殖力のない種の幾つかはすぐに滅ぶということだ。実のところ、人間も例外ではなく、子ども達はまだまだ充分ではない。まだ世界に対して数の少ない人間は、この二百年、少しは自らを自衛できるようになったとはいえ、装置が止まれば、あっという間に自然や太古生物に淘汰されて消えていってしまうだろう。

世界はずっと、こうしてラズーンの見えない泉によって、命を保たれ繋がれてきている.....それを知るのは、極僅かだ。

「.....わかりました」

ラズーンは『運命（リメイン）』を厳しく見つめた後、肩越しに告げた。

「しかし、もう少しだけ待って下さい。せめて、後、二日」

「.....最後じゃぞ」

「.....」

『太皇（スーグ）』の確認に、アシャはきつく唇を噛んで、水槽の部屋を見つめた。

2.ラズーン

「ジノ。ジノ・スタイルはいませんか」

「はい、姫さま。ここに控えております」

どこから姿を現したのか、一人の娘がリディノの前に跪いた。頭に深草色の布を巻き、薄緑の長衣に深草色の帯を締めている。深々と頭を下げると、黒い髪がさらさらと肩に触れて音をたてた。眩げに見上げた目は、やや重くも見える濃い青だ。

「御用でしょうか、姫さま」

「詩をうたってほしいの。構わない？」

尋ねるリディノに熱心に頷く。

「はい、もちろん」

「ユーノもアシャ兄さまもまだ帰ってきてないわ」

リディノはゆっくりと歩いて回廊の窓に近寄った。ジノが静かに目で追ってくる。

「もう、五日にもなるのに……」

憂鬱な顔で梢から漏れる日差しを見上げ、リディノは呟いた。

「おとうさまもイルファもレスも沈んでしまわれて……まるで屋敷が死んだよう……鳴き鳥（メール）の声も聞こえないわ」

「鳴き鳥（メール）は、ラズーンに次々集まってくる見知らぬ『銀の王族』に怯えているのでしょうよ、姫さま」

ジノがリディノの気持ちを引き立てるように応じた。

「そうね……でも、おとうさまの話では、これまで、これほど『銀の王族』が集まったことはなかったそうよ。それに、これまでなら、連れてこられた視察官（オベ）の方ともども、四大公のどこかの屋敷にお泊まりになるのが常なのに、半分近くの方々が、まっすぐに『氷の双宮』に入られるとか……泊まれた方も……ほら」

肩越しに視線を投げて、リディノは思い出させるように続けた。

「昨日来られたハイラカと呼ばれた『銀の王族』の方も、今朝すぐに『氷の双宮』へ向かわれたわ」

「そうですね、それに……」

ジノも考え込んだような色を、日に焼けた顔に浮かべた。

「『氷の双宮』へ『銀の王族』を連れて行かれた視察官（オベ）が、すぐに又、ラズーンを出発されるのも珍しいと聞きます」

「一体どうしたのかしら」

リディノは白い指先を軽く頬に当て、ほうっと溜め息をついた。

「諸国の忠誠を知るには大げさすぎるとは思わない？」

「……でも、このような動乱の世ですから……」

ジノはリディノの抱いた不安を、何とか和らげようとするように言った。

「乱れた諸国の現状を、よりよく捉えようとなさっているのではありませんか、『太皇（スーグ）』は」

「そうね……」

リディノは小さく息をついた。

「そうかもしれないわね」

「はい」

「……じゃ、ジノ、こちらへいらっしゃい。おとうさま方は私室にいらっしゃるのよ。私室で詩を聞かせてちょうだい」

「はい」

再び深々と頭を下げ、ジノは立ち上がった。

ジノはリディノづきの詩人（うたびと）、幼い頃は乳兄弟として育ち、二つ年上のリディノを、ジノはこの上なく尊敬し、愛してくれている。

「おとうさま？」

リディノは公の私室に入り、正面の豪華な織の敷物の上で、所在ない様子で物思いにふけっている父親に声をかけた。その右に寝そべっていたイルファ、隣で中に羽毛を入れ、ふっくらと仕立てた枕を抱いて丸くなっていたレスファートも目を上げる。

イルファの前の酒と食べ物には手がつけられていなかったし、レスファートの側の皿に盛られた色

とりどりの果物も、少年の食欲を誘っていなかった。泣きこそしていないが、眠れない夜を過ごしているらしいレスファートの疲れた顔が痛々しく、リディノはそっとその側に座り、少年の髪を撫でてやった。レスファートは身動きもせず愛撫を受け止めていたが、じっとリディノを見つめる目が決して寛いでいないことを示している。

「ふさいでいてはだめよ」

リディノもユーノやアシャのことが気にかかる、だがリディノは強いて明るい笑みを浮かべた。確信ありげに頷きながら、

「アシャ兄さまがついていらっしゃるのだから、絶対、大丈夫よ」

ジノを振り返って合図し、相手が入り口近くに座るのに優しく命じる。

「何か詩って、ジノ」

「何をご所望でしょうか、姫さま」

「そうね...」

迷って、部屋を見回したりディノの目に、中央の弦が切れたままのアシャの持っていた立風琴（リュシ）が映った。立ち上がって近づき、そっと取り上げ、ジノに渡す。

「アシャ兄さまのために、これで何か...」

「第三弦が切れていますね」

ジノが静かに受け取る。

「張り直しましょうか、新しいのに」

「いえ！」

自分でも意外なほどの強さでリディノは応じた。

「そのままでも弾けるのを」

「はい」

ジノは逆らわずに、他の四本の弦を一本ずつ弾いていきながら尋ねた。

「しかし、第三弦が切れているとなると、恋歌は無理ですね」

「一つも？」

「ええ。少なくとも、私の知っている限りでは」

リディノはジノのことばに切なく瞳を曇らせた。側に居ないアシャ、戻ってこないユーノの背後にレアナの影を感じ取る。リディノの想いは実らない、そう改めて示されたような気がして、急いで口調を変える。

「祭りの歌は？」

「無理です.....おや、ほんとだ」

ジノは反射的に応えて不思議そうに首を傾げた。頭の中でさうように少し目を閉じ、幾つかの詩をぶつぶつと口の中で呟いたが、首を振って目を開け、許しを請うた。

「私の未熟な腕をお笑い下さい、姫さま。第三弦が切れている以上、この立風琴（リュシ）で私が弾けるものはたった一つしかありません。どうか、他の立風琴（リュシ）を使うことをお許し下さい」

「たった一つとは？」

好奇心にかられて、リディノは問いかけた。

「姫さまのご所望には合いません。どうか、他の立風琴（リュシ）を...」

「何なの？ 言ってちょうだい、ジノ」

「.....『創世の詩（うた）』です」

リディノはゆっくり瞬きした。

「『創世の詩（うた）』...」

「はい」

「.....わかりました。では、それを、ジノ」

「.....はい」

ジノはなおも応じかねる様子だったが、やがて諦めたように立風琴（リュシ）を抱きかかえた。切れた第三弦を、邪魔にならないように上と下の枠に巻き付け、しばらく調弦を行う。イルファが体を起こし、レスファートが膝を抱えてジノに向き直った。少年の側に、リディノがドレスの裾を広げ直し、ふわりと座る。

ミダス公がなぜか物憂げな目を上げ、聞こえるか聞こえないほどの声で「運命...か」と呟く。

「それでは」

ジノは少し胸を張って息を吸い込んだ。丁寧な手つきで、第一弦、第二弦、第四弦、第五弦と弾いていき、第一弦の押さえ方を変えて、非常に高い第六番目の音を出した。そのちょうど一回り下の音に、声の調子を合わせる。

「それは彼の夜

時の果てのこと

まだこの世に光なく
闇もなくして
運命もなき夜のこと
死に絶えようとした世を
救うためにつくられた
彼の地ラズーン
神おわす地の創世の夜.....」

ジノの朗々と張った声は、ゆっくりと創世の伝説を語っていった。

それは長き戦いの果てであった。

東と西の神は、争い、そのうえに争い、またそのうえに争いを繰り返した。

そして、その戦いが終わった後、この地に残されたものは、荒れ、変わり果てた大地と、神々の戦いに使われた武器のために、見るも不気味な姿と習性を備えるようになった生物だった。荒廃したこの世界、かつては緑豊かな『地球』と呼ばれていたこの地の上で、それらの太古生物はお互いを喰み合い、殺し合い、地獄絵図を繰り広げていた。

荒廃の世、と呼ばれているのがその時である。

だが、そういった中でも、わずかに正常な姿を保ったものも居た。

彼らは東西の神々が争い始めた時、その行く末を読み取り、ひそかに自らの最高の力を結集させて、万が一のための小部屋を地下に造った。続く大変動の時代を乗り越えるべく造られたその小部屋は、生命を造り上げるための小部屋であった。

その小部屋で、彼らは荒廃の世を耐え忍び、自らの命を、種としての記憶を保存し、再生することによって存えた。

種の記憶は彼らのものだけが保存されているのではなかった。東西の神々が戦いを始める前に、この世界に生きていたもの、ありとあらゆる生物の種の記憶が、そこには保存されていた。

それらを再生し続けることによって、彼らは何とかしてその記憶を、荒廃の世が終わり、また再び彼らが栄える時まで残そうとした。

そして、その試みは成功したように思われた。

だが、運命はより苛酷であった。

ある日、彼らは、己の再生した記憶の中に、歪みが生じているのを発見した。記憶通りに再生したはずなのに、その再生された生物は、見るもおぞましい外の荒廃の世界の生物の特徴を多少なりとも備えていたのだ。

どうしたことなのだ。

人々はうろたえた。

これは一体、どういうことなのだ。装置は完璧であったはずだ。何が、どうなったのだ。

それでは、と一人が言い出した。

我々の中に、その因子を受けた者がいるのだ。忌まわしい外界の血を混ぜ込んだ、裏切り者がいるのだ。

それは誰だ。誰が呪われているのだ。

疑心暗鬼、人の心に棲む闇が、人々を焦燥に駆り立てていく。

このままでは、次に再生される生物、いや、再生される自分が、外の世界のような怪物になってしまう！ 誰だ？ 誰のせいだ!?

ついに、小部屋の中の人々は殺し合いを始めた。誰もが相手こそが怪物の因子を抱えていると疑い、相手さえいなくなれば元の安寧な日々が戻ると信じ。

倒れていく一人、二人、三人、四人.....だが、その間も装置は再生し続けていく。正常な姿のヒト、異常な姿のヒト、正常な姿の生物、異常な姿の生物。

最後に生き残った一人が、ようやく発見した。

異常な再生は誰のせいでもない。再生を繰り返すうちに、ほんの微細なずれが生じるのだ。そのずれが重なり続け、時に決定的な記憶を狂わせ、種の記憶を根本から変えてしまっていくのだ。そして、それは、装置による再生を繰り返す限り避けられないことなのだ。

同じもの、同じ種の記憶――それはデーヌエーとも呼ばれた――をもとに再生を繰り返す限り、どうしようもないこと.....ただ、抵抗する道は二つある。装置を壊し、この世の生命を絶ってしまうこと。もう一つは、新たな種の記憶（デーヌエー）を補充すること。

だが、最後の一人には、その決断は重すぎた。

この世の正常な生命の唯一のつなぎ目を断ち切れれば、世は混乱と破滅の果てに死に絶える。かといって、新たな種の記憶（デーヌエー）を補充するためには、これまでに再生して世界に放って来た生物

の中から、その保存者を選んでこなくてはならない。

その保存者が自分と同じ、少なくとも異常な因子をほとんど持たない存在である確率はどれくらいあるのだろう。もし既に外界と交わって、姿のみ同じである者であれば、それこそ忌むべき因子を、殺し合ってまで避けて来た因子を自ら呼び込むことになる。

ではどうすればいい。

煩悶と逡巡、創世の傲慢に浸ることさえできぬ心とその魂。

閃光がひらめき、その体は倒れた。

それを再生するために働く者はもう誰もいなかった。

装置は小部屋の中で、次第に歪んでいく種の記憶（デーヌエー）を元にひたすら生物を再生し続け、決まった手続きで地上へ、荒廃の世へ送り出していった。

最後の一人は、決断を運命に任せた……。

「……」

アシャは水槽の一つ一つを見て回った。

二日前までは空っぽだった、その五つの水槽に、今は五人の男女が横たわっている。額に薄い膜のような輪を嵌め、輪からは細い線が出て水槽の一部に繋がっている。

洗礼を受けている最中の『銀の王族』達だ。

「こいつは…」

中の一人に見覚えがあって、アシャは立ち止まった。

ユーノと同じ年ぐらい、淡色の髪の子少年だ。他の『銀の王族』の例に漏れず、幸せそうな笑みを浮かべて眠っている。

彼らの頭に今送り込まれているのはラズーンの歴史であり、送り込みが終わった後に、それを鍵として目覚める『銀の王族』としての知識と経験こそが、ラズーンを復活させる『呼び水』、同時に彼らが『銀の王族』としてふさわしいかを確認する心への審問だ。もちろん、肉体的な種の記憶（デーヌエー）は、既に彼らの細胞から採取され、記録され、蓄えられている。

（ハイラカ、だったな）

アシャは少年の名前を思い出すと同時に、その場を離れた。向かったのは、五つの水槽の一番端、四日前から眠り続けている『銀の王族』、ユーナ・セレディス。

「ユーノ…」

自分の声が深い憂いと切ない甘さに潤んでいるのがわかる。

透明な水色の液体の中、ふんわりと浮いている華奢な体の右肩からは、銀色の泡が煌めきながら浮き上がっている。再生率はやっと半分を越したばかり、意識もまだ戻っていない。だが、約束通り、その額には、他の者達と同様、透き通った薄い膜のような輪が嵌まっており、『銀の王族』としての洗礼が始まっていることを示していた。呼吸はやや荒く、時折苦しそうに眉がひそめられる。他の『銀の王族』にとっては幸福な面白い昔話と感じるようなものさえも、傷ついて回復途中のユーノにはかなりの負担になっていることは間違いなかった。

「ユーノ……」

眉を寄せる。心がねじ切られていくような苦痛を、アシャはじっと耐えた。ユーノを見ている限り、守り切れなかった罪悪感と、かけがえなく愛おしい存在を死地へ追い込まなくてはならない負い目に責め立てられるだろうとわかっていたが、側を離れる気にはなれなかった。

今すぐこの輪を外してやれば、ユーノは楽になるだろう。そして、ラズーンは貴重な知識を奪われ、やがてそれは『運命（リメイン）』の暗躍を助長していく。

それに、今ユーノから輪を外してやったとしても、彼女の助かる確率が上がるわけでもないことを、医師としてのアシャは哀しいほどに理解している。

（ユーノ！）

今すぐ苦痛を取り除いてやりたい、それは愚かで甘い、その場しのぎの自己欺瞞だとわかっている。理性ではそうわかっている、わかっているが。

（代われるなら、俺が代わってやりたい）

アシャは、こぶしを握りしめ、食い入るようにユーノを見つめた。

蒼白く血の気を失った唇は微かに開いて、透明な『マスク』の中で呼吸を続けている。細い腕が液体の中で波間に弄ばれる海藻のように、ゆらりゆらりと上下している。

ユーノをもう一度、命あるものとして抱き締められるなら、アシャは何を惜しむだろう？

（ユーノがもう一度俺を見るなら……もう一度俺の名を呼ぶなら）

しかめた眉を少し緩めた。切なくて苦しくて、身動き出来なくて竦んでいく自分が信じられなくて認められない。

泣き出しそうなのだ、と感じた瞬間にアシャは首を振った。
目に見えぬ大きな力と取引する。
(どんな代償だって払ってやる)

「...戦いの果てに
人の心は荒れ
生き物は己の姿を忘れて久しく
聖なる宮に籠りし者のみ
世を伝えんとして
生命（いのち）刻み
生命（いのち）重ねる.....」

ジノの声は哀調を帯びて、聴く者の心に沁み入った。

第三弦を鳴らさぬ代わりに、時折響く六番目の音は、時の流れを表してか、一定の間隔をおいて響き、落ち続ける水滴が、水盤に一滴二滴とその形を穿つようにも聞こえた。

「...いつしか
荒廃の世
古い息吹き浴びて
蘇らんとすれども
なお運命は激しく
宮に籠りし者の心に
呪いの血を吐く
かくして人の世の定めは
宮に籠りし者の心に芽生え
育ち、波立ち、
ついに宮の者もその生を果つ
地は太古生物跳梁し
天の嘆き深く
一つの星を送られん
ラズーンの
性のない神は目覚めの時を迎えたり...」

それはどこから来た人々であったのか。

或いは、彼らこそが『神』だったのかも知れない。

荒廃の世界へ降り立った来訪者は、すぐに小部屋を見つけ、入り込み、そこで起こったことの理解を得た。人がいない間も、永久動力で動き続ける装置を見つけ、何が行われようとして果たせなかったのかを察した。

彼には、それを止めることもできたはずだった。

だが、その時、再生されつつある一つのカプセルに目を止め、その子どもに何を期待したのだろうか、子どもが大きくなるのを待って、小部屋を制御する術を教えた。同時に、孤独に揺らがぬ精神を鍛える術、自分が見て取った世界の状態なども教え込んだ。

装置を止めてしまう代わりに、再調整した種の記憶（デーヌエー）を元に、新たに正常な生命を再生し、まずは子どもの周囲を落ち着かせ、やがてその外側に新たな国を造り、王を選び、任せ、そうして、子どもと一緒に、世界の仕組みを一から造り上げていった。

この装置では二百年しか、正常な種の記憶（デーヌエー）を保つことができない。

来訪者はそう言った。

だから、二百年たったら、お前は新たに種の記憶（デーヌエー）を補充するとともに、世界の状態を知るために、世に散らばった人々の幾人かを集めなくてははいけないよ。

でも、と初代の『太皇（スーグ）』は不安がった。

どうして私になし得ましょう。私は無力な人間の一人に過ぎません。

それでは、お前と一緒に、もう少しこの世を整えることにしよう。

来訪者は約束した。

そして、視察官（オペ）が造られた。

再生された生命体の中で、精神が強いものは金のオーラを放っている。彼らを集めて武術医術を修めさせ、中央の秘密をある程度まで教えて、世界の様子を見に行かせるのだ。また、その中から次代のお前を選び出せばよい。

次に『銀の王族』が造られた。

特に種の記憶（デーヌエー）として見事な、整ったものを持っているものには、銀のオーラ、それも視察官（オベ）が探し求めた時だけ、視察官（オベ）に見えるようなオーラを持つように、特殊な形質を付与しよう。言わば認識票としてだが、それを持つ者に対しては攻撃しにくくなるように、他の者に条件づけをして、その一族が絶えないようにすればよい。

二百年毎のラズーンの種の記憶（デーヌエー）が崩れる時に『銀の王族』、つまり種の記憶（デーヌエー）を極めて良好な形で保存している生きた器を、視察官（オベ）に集めさせてラズーンへ連れてこさせ、その際に種の記憶（デーヌエー）を細胞から、世界の状況をその者の記憶から、それぞれ記録すればよいだろう。

そして、人間の崩れ、亜種としての『運命（リマイン）』は施政を一部分担させればよい。時に、あからさまに動かしては反発ばかりが大きくなる、施政の裏側の力として。闇の駆け引きを支配するものとして。

そうして、来訪者は去って行った。

残された人間は、死に絶えかけた世界を再生し始めた、その小部屋――『氷の双宮』のもとに。

ジノはしばらく黙って立風琴（リュシ）をかき鳴らしていた。

小柄な体が緩やかに揺れている。旋律を瞼の中で追っていたらしい閉じた目が、少し開かれた。首を傾げる。頬に黒髪がさらさらと流れ、頭に巻いた深草色の布が滑り落ちて垂れた。

それを軽く払って、ジノは再び、六番目の音を高く激しく、まさに時を刻むように鳴らしながら詩い始めた。

「...星は『太皇（スーグ）』を選びたり

そしてまた

視察官（オベ）を選び

『銀の王族』を選びたり

生命（いのち）は再び芽吹き

喜びの声を上げて世に散り

そして

ラズーンはこの世の統合府として臨む

聖なる宮は『氷の双宮』として

神のおわす場所となる

ラズーンの白き壁の中

世は始まりたり

古き伝えはことばを添えり

産めよ

増やせよ

地に満てよ、と.....」

鋭く鳴り続けていた六番目の音が、次第に穏やかな響きになった。他の弦の音に混じり出し、それらの音と入れ替わり立ち替わり人の耳に届くようになり、やがて、全くその響きを消していった。

柔らかな第一弦、第二弦、第四弦、第五弦、音が交差し、夢を紡ぐ。さらさらと流れる黒髪に光が躍り、淡い陶酔の表情で、ジノは打って変わった眠たげな声で詩い出した。

「...ラズーンは

失われた都

枯れた泉

死して飛ばぬ人の夢

全ての栄えがさもあるように

永遠に続く栄えはない

いつしか

美（うるわ）しきこの都も

朽ち果て

大地の上に横たわらん

しかし、世は続く

人の命は続く...」

声が次第に豊かな情熱をたたえ始めた。ジノの日に焼けた頬が、高揚する気持ちを示してか、熱い血の色を昇らせ始める。

「...死が人の運命なら

生も又人の運命
過ちが人の宿命なら
悔いも又人の宿命なり
ラズーンは滅び
失われた都として
石碑の中に忘れ去られる時にも
命はひそやかに芽吹くであろう
石碑の側に
瓦礫の中に...」

ジノはきつく目を閉じ、うなじを伸ばした。おそらくは山場、氣力を溜め直し、一気に最後まで詩
い切ろうとする。

「.....そして
再び創世の時は来たりて
世は人の命を紡ぎ.....!!」
唐突に、詩が切れた。

「どうしたの？」
訝しげに尋ねるリディノに、ジノが呆然と呟く。

「第一弦が...」

「え...？」

リディノの目に、第一弦が弾け切れた立風琴（リュシ）が映った。レスファートがびくりと体を強
張らせ、イルファがぐっと唇を引き締める。

「お許しを、姫さま」

ジノは青ざめたりディノの顔を見つめ、深々と頭を下げた。

「時を刻む弦が切れては、『創世の詩』どころか、どんな詩も歌えません」

「どんな.....詩...も...」

リディノはへたへたと座り込んだ。

「ユーノ！」

アシャは叫び声を上げて水槽の蓋をはねのけた。

さっきまで水色の液体の中央に浮いていたユーノが、ぎゅっと唇を引き締め歯を食いしばり、苦悶
の表情を見せたかと思うと、がぶりと肺の中の空気全てを吐き出すように息を吐いて底に沈んだのだ。

「ユーノ！ ユーノ！」

叫びながら、濡れ鼠になってユーノを抱き上げる。ぐったりと抵抗なく抱かれた体は妙に頼りなく、
この両腕の間から溶け落ちていってしまいそうだ。額の輪を取り除く。びくっと体を強張らせたユー
ノがもがくように睫毛を震わせる。

「アシャ...」

「お許しを、『太皇（スーグ）』！」

背後からの声に、アシャは振り返らぬまま叫び返した。選択肢など始めからなかった。たった一つ
の可能性に挑んだのは、ただただ取り戻したいがためだった。

「私にはユーノを放っておくことはできない！」

息を吐いて目を閉じる。瞳の奥に弾ける黄金の色、体から滲み出すエネルギーの気配、一気に広げ
てユーノを包む。

（頼むから）

アシャは歯を食いしばりながらユーノの濡れた頭を抱き寄せた。たちまち冷えて来る体をマントで
覆ってしっかり抱き締め、抱え込んだ頭に頬を押し当てる。なお固く目を閉じ、精神力を注ぎ込む。

（頼むから目を開けてくれ、ユーノ）

呼びかけに答えるように、ひくりとユーノの指が動くのを、胸のあたりで感じた。頬をすり寄せ、
より強く抱き締める。骨も筋肉も存在しないようにどこまでも抱き込んでしまえる体に恐怖が募る、
まるで幻を抱いているようで。

（ユーノ！）

爆発してしまえばユーノを壊してしまう。弱すぎでは呼び戻せない。アシャの知らぬ世界に遠ざかっ
ていこうとするユーノを、体で心で引き止める。

制御しながらの力の開放、見る見る疲労感が這い昇ってくる。他人に精神力を注ぎ込む、しかも破
壊するためではなく、生き返らせるために注ぎ込むなどというとんでもない芸当は初めてだ。

びく...っと、今度は垂れた足先が震えたようだ。

(保て)

焦点が少しでもずれてしまえば、アシャの力はユーノを破壊してしまう。汗が流れ落ちる。金のオーラが揺れて波打っているのがわかる、脆く危うく頼りなく。

(まだだ、まだ保て)

きり、と奥歯が鳴った。頭痛がする。吐き気がする。全力を放つ、だが一度に解き放ってはいけない、ユーノの心の器と受け入れ口の許容度を確認しながら、少しずつ少しずつ、気力を取り戻すエネルギーを送り込む。

オーラの気配が薄れてきた。エネルギーが足りない、アシャの保持出来る量では全然足りないとかかってくる。全て注ぎ込んでしまえば、アシャの心が外殻を失って崩れる可能性が高い、それでも。

「...ふ...」

「っ」

ユーノが小さく息を吐いた。たったそれだけのことなのに、胸に広がったのは極めた快感に限りなく近い幸福感、体の中心を貫かれたような喜びに融けそうになる。

(俺は、これほどこの娘が大切なのか)

甘く切ない波に溺れかけながら、胸の底で呟いた。

ユーノの指がそっとアシャの服を握りしめた。小刻みに震えながら、存在を確かめるように力を込めてくるのに、アシャは目を開く。もう一方の手、負傷している右手が、探りながら同じように服を掴んでくるのに気づいた。

「...ユーノ...」

滴る汗を感じるなど、どれほど昔のことだろう。細めた視界にユーノの顔が血色を取り戻してくるのが見える、それが疎むほど嬉しくて、囁きながらその頬に唇を触れる自分が、無意識に微笑んでいるのを感じる。

気力が落ちる、エネルギーが止めどなく流れ出し、アシャの原型はもうすぐ姿を失うのだろう、それでもユーノの中に注ぎ込めるのなら本望だとしか思えない。

「俺は...」

お前の中に消え失せる。なのに、この喜びは何だろう、どこから来るものだろう。今まで経験したことがない、快感としか思えないこの感覚は。

「.....ああ...」

漏らした声が甘い。うっとり目を閉じかけた次の瞬間、肩に力強い波動を感じて瞬きした。振り返る、同じように金色のオーラに包まれ出した『太皇(スーグ)』を見て取り、目を見開く。

「『太皇(スーグ)』...」

「続けなさい、わしが補佐しよう」

白く長い髭と白髪に囲まれた顔に、穏やかで静かな。世の成り立ちと仕組みを知り抜いた者のみが浮かべられる、不思議に暖かい笑みが広がっている。

「『銀の王族』と、ラズーン随一の視察官(オペ)を失うわけにもいきまい」

「.....あり、ありがとうございます」

掠れた声がどこかがっかりしたように響いたのだろうか。

それでも、アシャ一人ではユーノを取り戻せないのはわかっている。

再び集中を高めてユーノの体を抱き締め直す。『太皇(スーグ)』の手から伝わってくる力が加わって、さっきより数段楽に力が制御できる。

もっとも『太皇(スーグ)』の補佐だけではなく、ユーノが次第に意識を取り戻し、急速に回復し始めたからの負担の軽減、滑らかに整えられた道筋に容量を上乗せしていだけで済む。

「あ...ふ...」

微かな呼吸が始まる。自ら腕を引き、足を体に寄せて引き上げる。

まるで胎児から再び産まれ直そうとするように、ユーノは小さく縮こまった。身震いを繰り返し、温かみを求めてアシャの腕の中に潜り込んでくる。

やがて、唐突にユーノは目を開いた。

「ユーノ...?」

囁く声が、どこから聞こえたのかと訝るように、ユーノはゆっくりと首を回した。生まれたての赤ん坊が自分の居場所を探るように、どこか怯えたような目で辺りを見回す。

やがて、濡れた黒い瞳が期待を込めて見つめるアシャに止まった。邪気のない凝視、ふわりと柔らかな笑みが広がる。

「ア...シャ...」

「ああ...」

ぞくり、と背筋を走ったのは興奮か畏怖か。体を駆け上がる震えを必死に殺しながら、アシャは笑み返す。

「わ...た...し...？」

「.....もう少し眠っておいで」

アシャは低く囁いた。

「疲れただろう...？」

「.....うん...」

僅かに頷いて、ユーノは目を閉じた。それほど待つ間もなく、すやすやと安らかな健やかな寝息を立て始める。

「.....どれ」

ユーノの寝顔に見惚れるアシャの背後から、『太皇（スーグ）』が手を伸ばして来た。

「わしが戻してやろう。お前は疲れ切っておる」

「大丈夫です、私が.....っ」

ユーノを抱いたまま立ち上がりかけ、アシャはカクンと腰を落とした。

「え」

危うく腕から投げ出しそうになったユーノを慌てて抱き締める。

「だから言ったじゃろう」

『太皇（スーグ）』が笑みを含みながら応じた。何度か力を溜めて立とうとしても、どうしても立つことができないアシャから、軽々とユーノを抱き上げ、水槽の中に戻す。『マスク』は付け直したが、額の膜の輪はつけずにアシャに笑いかけた。

「命をかけて取り戻した功績に免じる。洗礼の続きは伸ばそう。回復したら、この娘の安否を気遣って待っている者達に知らせるがよい」

「は...」

何とか拝跪の礼を取り、立ち去る『太皇（スーグ）』を見送った後、アシャは溜め息をついて体を崩した。ユーノが眠る水槽にもたれる。正直なところ、座っているのも倦怠感が強くて苦しい。けれど、心は軽やかに弾んでいる。

（取り戻した）

堪え難い喜びが胸を膨らませる。充実感と達成感。

（ようやく、守れた）

目を閉じて、息を吐き.....アシャはそのまま深い眠りに落ちていった。

部屋には重い沈黙が満ちていた。

どの目も、ジノの手の、第三弦と第一弦の切れてしまった立風琴（リュシ）を食い入るように見つめている。

「姫さま……一体…？」

ジノは、突然、リディノ、ミダス公、それに二人の客人を襲った緊張と脱力感のないまぜになった雰囲気はわからず、問いかけた。びくっと細い肩を震わせ、リディノが桜色の唇を開く。

「あ…」

なんでもないと言うように笑おうとしたその目から、大粒の涙が零れ落ちるのに、ジノははっとした。

「姫さま?!」

「……ごめんなさい、ジノ…」

リディノは震える声を励ましながら続けた。

「ただ…嫌な予感がしたの……前に、その第三弦が切れたとき、ユーノが花苑で深手を負ったから……また…」

その先をリディノが続けられるわけもなく、彼女は唇を押さえて目を伏せた。零れ落ち続ける涙は紅潮した頬を滑り、ドレスの上に転がる虹の粒となった。痛ましく辛く、最愛の主が泣く姿を見ていたジノは、立風琴（リュシ）を置き、低い声で彼女を慰めようとした。

「姫さま……姫さまが嘆かれることはないのですよ……お優しい姫さま……リディノ姫…」

「ウタビトさん」

不意にことばを遮られ、ジノはむっとして向き直る。声の主の意外さにリディノも目を上げて振り返る。てっきり声を殺して泣いているとばかり思ったレスファートがむくりと体を起こして、ジノに呼びかけている。

「ぼくに…今の続き、教えて」

泣かなかったわけではないらしく、アクアマリンの目はどこか不安げな影を宿し、潤んでいる。だが、少年は揺らがぬ口調で、応えぬジノに向かって再び呼びかけた。

「死が人のウンメイなら、から」

「しかし…」

ジノは顔を歪めて渋った。

「立風琴（リュシ）の第一弦が切れた今では…」

「教えて」

レスファートは頑なに繰り返した。じっと見ていたミダス公が、どこか重苦しい声音で遮る。

「今、詩（うた）を習ってどうするのだ、少年よ」

きっ、と、レスファートは正面からミダス公を睨みつけた。応えずに、ジノに向き直る。

「それを訊いて、どうしようってんです？」

イルファが口を挟む。ミダス公は疲れたように見つめ返し、一言、

「『運命』には逆らえぬ…」

「ウタビトさん、教えてよ」

イルファとミダス公の会話に頓着せず、レスファートは頼み込んだ。一途さに押されて、リディノがジノに命じる。

「ジノ」

「…はい、姫さま」

ジノも諦めた。

「では、レスファート様、私の詩う通りに繰り返して下さい」

「…」

こっくり頷いたレスファートの意図はわからない。けれどもリディノが詩えと言うのなら、それに逆らう意味はない。立風琴（リュシ）の第二弦をかき鳴らし、音をとり、調子を合わせて詩い始める。

「死が人の運命なら…」

「死が人のウンメイなら…」

高く澄んだレスファートの声が、ジノの声を丁寧になぞる。

「生も又、人の運命…」

「生も又、人の運メイ…」

「過ちが人の宿命なら

悔いも又人の宿命なり...」
「過ちが人のシユクメイなら
悔いも又人のシユク命なり...」
たどたどしい子どもの声音が、ジノの豊かな声をすぎるように追い、抜き去ろうとするように駆ける。

「ラズーンは滅び
失われた都として...」

「ラズーンは滅び
失われた都として
セキヒの中に忘れ去られる時にも...」

「.....忘れ去れる時にも
命はひそやかに芽吹くであろう
石碑の側に
瓦礫の中に...」

「命はひそやかに芽吹くであろう
石ヒの側に
ガレキの中に...」
レスファートは本物の詩人（ウタビト）のように、膝を組んで目を閉じて詩った。

「...そして
再び創世の時は来りて...」

「...そして
再びソウセイの時は来たりて
世は人の命を...」

「世は人の命を紡ぎ
人は命の綾を織りなし
手をつなぎ
心を結び
慈しみあい
愛しあい
命の綾は世を生まれ続けさせるのだ...」

追いかけてくるレスファートに、まるで詩を奪われかけたような想いで、ジノは最後まで一気に通した。

だが、レスファートはその後を続けない。

「レス？」

「詩えるんじゃないか」

リディノの声に、レスファートは静かに目を開いてジノを見返した。

「.....！」

ジノは思わず少年を見直した。自分がしていることの意味がわかっているのかいないのか、レスファートはきゅっと眉を寄せて言い放った。

「立風琴（リュシ）がなくても詩えるじゃないか！」

「レスファート様...」

「どの弦が切れたって、詩はうたえるんだ。だって、詩うのは立風琴（リュシ）じゃなくて、あなたなんだもん！」

すっと立ったレスファートはジノの手の立風琴（リュシ）を取り上げた。呆然と奪われるままになっていると、同じく涙に濡れた目を見開いたままのリディノを振り返ったレスファートが、

「これは、ユーノじゃない。弦が切れたって、立風琴（リュシ）が壊れたって、ぼく、ユーノを見るまで信じない！」

言うや否や、手に切れた弦を巻き付け、くっ、と力任せに引き千切った。小さな手に弦が食い込み、紅が散る。その雫を拳に握りしめたレスファートの目から、やっと涙が零れ落ちた。

「ぼく、ユーノをむかえに行くんだ。ユーノが帰ってきてくれないなら、ぼくがむかえに行くんだっ！」

「レスッ！」

叫んで走り出すレスファートを、イルファは跳ね起きて追いかけて行った。

長い夢を見ていた気がした。

目を開けるとアシャの顔が真上にあって、ユーノはなぜか無性に切なくなった。

「気がついたか？」

アシャが優しく尋ねてくれる。

「五日間も眠ってたんだぞ」

「こ...こは...？」

「『氷の双宮』だよ」

アシャのことばに辺りを見回すと、同じような清潔なベッドに幾人かの少女が横になって昏々と眠っているのが目に入った。

「『銀の王族』だ」

ユーノの疑問を読み取ったように、アシャが応えた。

「洗礼を受けた後の休息だよ」

「私は...」

「おまえは、もう少し復調してからだ」

「ふくちょう.....。.....っ」

突然、安堵が湧き上がった。ミダス公の花苑でのことが次々思い浮かび、自分の命が助かったのだということが信じられなかった。無意識に熱いものが目から溢れ伝い落ちていく。アシャが悩ましげに眉を寄せ、そっと指先で涙を拭ってくれながら尋ねてくる。

「何を泣く...？」

「だって...」

(もう、あなたに二度と会えないと思っていた)

「だって.....」

溢れる涙が止まらない。アシャの指を果てなく濡らす。

「だ...って...」

(また、会えた)

ことばにならない。

死の黒い予感が幾度も体を駆け抜けていったのを覚えている。体が冷たくなり、心が凍んで凍え、意識が闇に吸い込まれていこうとするたびに、暖かいものがユーノを引き止めた。金の、眩い金の光.....それに抱かれて、ユーノは長い長い、時の旅をしてきたような気がする。

「起きられるか？」

「ん...」

アシャの手を掴む。

(あったかい)

涙がまた意識しないまま零れ落ちる。

(生きているって、あったかい、んだ)

今まで剣の切っ先で切り捨てた命も、こんな風に温かいものだったのだろうか。いや、確かにそうに違いない、浴びた返り血の冷たさに感わさされていただけで。

さっきまでユーノが味わっていた深く冷たい闇と、この光の現実を、きつと倒してきた相手も味わってきたのだろう。今ユーノ一人が味わっている命の実感が、これまでユーノが対して来た全ての存在にあったはずだろう。

それらの命を、ユーノは奪い、失ってきた。

「...っ」

愚かしいことだ情けないことだ、それ以外の方法を思いつかなかった、考えている暇などなかった、戦わなければユーノはこの理解さえも得られず死んでいたのだから、だが。

「.....つく...っ」

「ユーノ...」

「アシャ...っ」

本当に、何ともならなかったのかな。

本当に、他に方法はなかったのかな。

カザドを敵と見なし、効果的に始末するために挑発したこともある、仕掛けたこともある、だが、それは本当に必要だったのか。

「私...っ」

揺さぶられた心の奥を泣きながら覗き込んでいくと、小さな小さな泉が見えた。

暗闇の中、微かな光を放ちながら、今にも途切れそうになるほど少ない水をかろうじて湧き上がらせている泉。

だが、その泉をまるで干上がらせようとするような、激しい紅の視線を感じる。

その前で、ユーノは剣を抜くこともできずに凍んだ。抜けば自分と同じ、相手にもある命を断つ。その覚悟なしに剣は抜けない。

ユーノは本当に、相手の命を奪う覚悟を決めていたか？
それがなければ、相手を制圧しても、自分の中にあるこの泉に振り向くことができなくなる、そう
わかった。

セレドのために戦っていた。家族のために戦っていた。死にたくないから戦っていた。けれど、ど
こかで振り回した剣が当たただけだと言いつてをしていなかったか。恐怖に無用な剣を突き出さなかつ
たか。

向かうべきは周囲の敵ではなく、泉が絶えるかも知れないと竦む自らの恐怖そのものだったのに。
(命を奪わないためにどうすればいいか、考えることだったのに)

「あ...」

ふいに眩い光が頭の奥に過った。のろのろと額に手を当てる。

何だろう、何か、頭に全く違うものがあるような感じを受ける。

この場所に対する、ラズーンに対する、唐突な理解。

「ここは.....泉（ラズーン）...なんだね.....？」

今にも枯れそうな小さな小さな泉。

世界にあり、自らのうちにあり、そして、全ての命にある、もの。

「生命（いのち）の生み出される統合府.....でも.....私はどうしてこんなことを...？」

「洗礼を半分受けたんだ」

アシャがベッドに腰を降ろしながら応じた。

「死ぬかと思ったぞ」

薄い笑み、けれどユーノを見つめる瞳がひどく熱っぽい。思わずたじろいで目を伏せる。

「ご...めん」

軽く頭を下げた髪に、ごく自然にアシャが指を伸ばして触れて来た。今までもよくあったことなの
に、なぜか直接肌に触れられたような切なさに、僅かに身を引く。とくとく、と急に高鳴った胸に戸
惑い、慌てて言い聞かせる。

(レアナ姉さまのアシャだぞ)

何をいまさら揺らいでいる。

涙を流しているからか、と気づいて、急いでごしごとと両目を擦って涙を拭いた。

(ちっちゃな子どもに見えてるのかも知れない)

強いて顔を上げ、間近にあったアシャの顔を真正面から見返し、精一杯につこり笑った。

「心配してくれて、ありがとう」

「.....後の半分は、全快してからだ」

何かを言いたげに、まだ髪に触れていたアシャは、ユーノのまっすぐな視線に一瞬怯んだようにゆっ
くり瞬きし、やがて小さく吐息をついた。諦めたように手を下ろす、だが、次の瞬間、一気に間合いを
詰めてユーノに迫る。

「アシャ...っ」

とっさに強張らせた体を、アシャは空気のように軽々と抱き上げた。滑らせた手に腰の剣は触れない。
その手も包むように抱き込まれて、体が一気に熱を上げる。

「ちょっ」

「さ、帰ろう」

ユーノのうろたえを意にも介さず、アシャは悠々と歩き始める。

「レス達が心配している」

「大丈夫だよ、歩けるっ」

「だめだ」

抗議は一言で封じられた。言い返そうとしたことばは、静かに見下ろすアシャの威圧感に圧倒され
る。貫くような紫の瞳、殺されるというよりは、奪われる、という感覚。泉の中央に飛び込まれるよ
うな衝撃に目を閉じる。

(卑怯もの)

罵倒は口にできなかった。

(そんな目で見ると)

「.....もう少し、ここにいろ」

響いた声が微かに震えたように聞こえて目を開いたが、相手はまっすぐ前を見ているだけだった。

「レス！」

「いくのっ！」

「ヒストでは無理だっ！」

「ヒストが行きたがってるんだもん！ はなして、イルファ、イル...」

「レス？」

どうやってヒストに跨がったのか、ヒストがなぜ少年を受け入れたのか、とにかく既に馬上で今にも手綱をとり、走り出さんばかりだったレスファートが、凍りついたように動きを止めるのに、イルファは相手の視線を追って振り返った。

「お」

「ユーノだ...」

ぼつりとレスファートが眩き、差し伸べられていたイルファの腕をすするすと伝って馬から下りた。イルファも呆然と背後を振り返ったまま、レスファートが降りるのに無意識に手を貸してやり、ゆっくり近づいてくる馬を見つめる。

「ユーノ...か？」

「やあ、レス」

「おまえ.....おい、アシャ」

「うまくいったのさ」

にっと笑うアシャの顔が子どものように無邪気で嬉しそうだ。馬を止めて降りる、続いて、まだ右肩が充分使えないのだろう、危なっかしい動きのユーノを支えて降ろしてやる。

やがて地面に降り立ったユーノは、少しおどけた調子で片手を広げてみせた。

「レス？ 私を忘れたの？」

「ユーノ.....ユーノ.....ユーノ！ユーノ！ユーノ!!」

何度呼んでも呼び足りないように、レスファートはユーノの名前を連呼して飛びついていった。僅かによろめいて、それでも屈み込んで抱きとめ、ふと、ユーノが少年の片手が血だらけなのに気づく。

「これどうしたの、レス？」

「いっ...いたいのお！」

レスファートがくしゃりと顔を歪めると、わああっと声を上げて泣き出した。ぴたりとユーノの首に片手を巻き付けて離れないまま、傷ついた方の掌を開いて見せる。

「あーあ、何で切ったんだ？」

「つく...っ、痛いよ...お、ユーノお...」

「うんうん、よしよし」

「あーあーあーあー」

イルファは顎の先をかきながら呆れてみせた。

「ユーノがいると、とたんに甘え出して...」

「どうしたんだ？」

きよとんとしているアシャの問いかけに肩を竦め、

「後で話す。そっちの話も訊かなくちゃならんからな」

「わかっている.....ユーノ！ レス！」

一瞬瞳を翳らせたアシャが、くつついたままの二人を振り返る。

「あ、うん」

「ユーノお」

「うん、一緒に行こうな」

レスファートを服にしがみつかせたまま、ユーノがミダス公の屋敷に向かって歩き出す。

「ユーノ！ ...アシャ兄さま！」

歓喜の声を上げて、リディノが駆け寄ってきつつあった。

3.創世の詩（うた）

「.....」

更けていく夜の中で、ユーノはベッドの中に埋まり込んだまま、じっと窓の外を見つめていた。

ミダス公の落ち着いた屋敷の一室、清潔なベッド、穏やかで柔らかな雰囲気の中に横たわっているというのに、心は昼間新たに得た知識のために、なかなか眠りにつこうとしなかった。

（疲れてるはずなんだけどな）

苦笑して、枕元の剣が、白々とした月光に照らされているのを見やる。その酷薄な光と共通する感覚、それがラズーンについての知識の印象だった。

（ラズーンはこの世の統合府、生命の統合府だ。その成り立ちはわかった。ラズーンの二百年祭が何を意味していて、それが太古生物の出現とどう関わっているのか、なぜ『銀の王族』が必要なのかもわかった）

そうだ、わかったことはたくさんある。解けた謎も一杯ある。

（視察官（オペ）が何なのか、『銀の王族』が何なのかもわかった）

だが、中途半端に知識を得たせいで、逆にわからなくなったこと、新たな疑問となったこともたくさんあった。

（でも、なぜ生命を生み出せるほどの『氷の双宮』なら、どうして太古生物が現れ出した時点で、再生を止められなかったんだろう？ どうして『銀の王族』を集めてくるまで、太古生物の復活を放っておくんだろう？ 止めていけないわけではないだろう？ 地に人は満ち、人は人を生み出せるんだから？）

窓の外の闇から、ジェブの葉鳴りが響いて来る。

「ん.....ユーノ.....」

すぐ側に潜り込んで寝息を立てていたレスファートが、小さく寝言を呟きながらもぞもぞと動いた。ユーノがそこに居るのを確かめるように、手を伸ばして探り、夜着を掴んでぴったりと体をくっつけてくる。手足を縮めて丸くなりながら、小動物の赤ん坊が母の匂いを嗅ぐように、鼻をひくつかせてユーノの体に頬をすり寄せた。ふうっ、と大きな溜め息をつく。

「ユーノ.....いる.....」

微かな安堵の声、レスファートはそのまま再び寝息を立て始める。

「レス...」

心の中を占めていた謎を一時放り出して、ユーノは微笑んだ。くうくうと眠る少年の傷ついたこぶしをそっと握ってやる。

レスファートの拳がなぜ傷ついたのかはイルファから聞いた。それほどまでに捧げられた想いに、身が引き締まるのと同時に、ささくれ立っていた胸の底に、温かな水が振りまかれた気がした。

温かさ.....絆の与える温かさが、これほど人を慰ませ、力付け、再び前へ進もう、怯むまいと思わせるとは知らなかった。守らなくてはならない、大事にしなくてはならない、生き延びなくてはならない。ならない、ならないばかりで追い詰められ、透明な壁に押し出され張りつけられていたような気持ちだが、もっと厚みのある、深みのある、したたかで強いものに変わっていきつつある。

大事にしたい。

笑顔を見たい。

もちろん、今までも家族や仲間に笑っていてほしいと思ったことはある。けれど自分は、と振り返ると、自分は笑えていなかったかもしれない。笑えていない自分に傷つく誰か、のことなど考えていなかったかもしれない。

自分が傷つくことで傷ついてしまう誰かがいる、そのことを、レスファートのこぶしで初めて深く考えたのかもしれない。

（だからアシャも...何度も怒った.....怒ってくれたんだ、きっと）

レアナの妹、セレドの皇女、『銀の王族』、旅の仲間。

いろいろな理由をつけて、ユーノはアシャの手を拒んできたけれど、その中にある『ユーノを大事にしている』という部分を、ただの一度もちゃんと受け取らなかった気がする。

「ばか、だなあ...」

だから子ども扱いされてしまうのだ。自分勝手な理由や思い込みで、込められた気持ちをちゃんと考えもしなかったから。欲しいものじゃないからと、ただそれだけで全部弾いてしまっていたから。

（他の人もそうだったのかな）

今までたくさん、ユーノに与えてくれようとしていたのに、ユーノは全く気づかずに皆弾いてきてしまったのかもしれない。自分一人が重荷を背負ったつもりで、弾いた手の痛さを感じることもさえてきなかった。

手をレスファートの頭へ滑らせ、数回撫でて軽くキスをする。

(ありがとう、レス)

いつもいつも、本当に大事なことは何か、本当に守ることは何か、必ず教えてくれる小さな存在。けれど、かけがえのない存在。

守りたい。

愛したい。

(君を、敬う)

なるほど、この少年はレクスファの次期国王としてふさわしい。その貴重な一粒種をユーノに託すことになってしまった王の心痛、ふざけてはいるが行く先さえわからぬ旅へ同行したイルファの武人としての覚悟もまた、ユーノには見えていなかった。

「確かにこれじゃ...セレドの跳ねっ返り、でしかないや」

国を背負って立つなど、度量においても才覚においてもまだまだだ。

「これからもよろしく」

囁きに気づいたように、僅かにレスファートが微笑むのを、ユーノは優しく見つめた。何があろうと、今夜一晩はユーノの側で寝るんだと言いはってきかなかったレスファートに、旅路の始めを思う。レスファートの失った母親の物語を聞いたことを。

(おかあさま)

目を閉じながら、名前も顔も知らないけれど、この少年をこの世界に送り出した母なる力に、胸の奥で頭を垂れた。

(彼を守り切れるよう、お守り下さい)

「ユーノ？ 起きてる？」

「はい」

ユーノは、ベッドの上に寝そべりながらあれやこれやと他愛もない話をしていたレスファートの相手になるのを止めて、顔を上げた。

『氷の双宮』から帰ってきて五日目、ようやく体調も本調子となってきたが、リディノの心配のせいで、まだベッドに縛り付けられ、少々退屈して来ていたところだ。

もともと、レスファートは久しぶりにユーノを独占出来るとあって、上機嫌で、毎日のようにユーノの側に張り付いていたが。

「お客さまよ」

「私に？」

扉を開けて顔を出したりディノの背後から、見覚えのある顔が覗いて、ユーノは呆気にとられた。

「ハイラカ...」

「やあ」

人なつこい青い瞳が、出会ったときそのまま、穏やかにこりと笑った。

「久しぶりだね」

「ああ.....あなたも『銀の王族』だったんだっけ...」

「うん」

リディノが気をきかせてくれたのか、レスファートを伴い部屋を出て行く。不満そうに唇を曲げながら、それでも来客の前で駄々をこねるほどレスファートも子どもではない、振り返り振り返りつつ、立ち去って行く。

レスファートを気にしつつも、近寄ってきたハイラカに椅子を勧め、ユーノは起こした半身を振り向けた。

「何？」

「ああ...いや」

がっしりとした木の椅子に座りながら、どこか眩そうに瞬いたハイラカが苦笑する。

「リディノ姫から聞いたよ。傷は大丈夫かい？」

「うん」

にやり、とユーノは不敵に笑った。

「もうすっかりね。リディンたら心配性で、まだ歩き回らせてくれないんだ」

「そりゃ、心配するよ。普通の女の子なら生きていますか？」

「！」

ぎくりとして、ユーノは相手を見返した。無言の問いかけを感じ取ったのだろう、ハイラカがゆっくり頷く。

「知ってる。でも、驚いたよ」

「...だろうね」

とても女には見えなかった、そういう意味だろうと察して、何となく情けなくなると、柔らかかに微笑み返したハイラカが続けた。

「そういう意味じゃない。線が細いな、とは思ってたんだ。だけど、僕が知っている限りじゃ、あんな気迫を持った人間は、男でもそういなかった。だから、てっきり男だと思い込んでいたんだよ」

「...」

ユーノは少し目を伏せた。一瞬心を覆った切なさを振り切るように、顔を上げ、笑い返す。

「そうでなきゃ、生きてこれてないもの」

「.....だから、気になっていた」

「え？」

ハイラカがためらいがちにことばを継ぐのに瞬きした。椅子に行儀良く膝を揃えて座っている相手を見つめる。

窓からの風が、ハイラカの淡色の、やや長くなった髪を吹き過ぎていった。

「よ...し」

アシャは第一弦と第三弦を張り直した立風琴（リュシ）を見つめ、満足して頷いた。

新しい弦は、他の弦より僅かに白っぽい銀色に陽を跳ねている。弾くと手元ではなく、遠く高い所で鳴ったような、澄んだ音が零れた。

（ユーノ）

頭の中で、第三弦が切れた時の記憶が蘇って、改めて第三弦を確かめる。弦は力強い手応えを返してくる。もう、切れることもあるまい。

紫の長衣の裾を払って立ち上がる。

ユーノに聴かせ損ねた恋歌を聴かせるつもりだった。

回廊へ出て、ユーノの部屋へ歩き始める。

「アシャ兄さま！」

背後から声がかかって、アシャは振り返った。

一定間隔をおいて造られている窓からの日差しが、明るい四角の光を回廊に焼き付けている。

その中を、リディノが深緑色の、少年風の長衣を翻らせて駆け寄ってくる。きらきら輝く巻き毛は衣の肩に乱れ、ちょっと気取った形で緑の飾り紐を使ってまとめているところは、アシャの女性形と言えなくもない。

「どう？」

「何だ」

アシャは苦笑した。

「俺のまねか？」

「まねなんて言わないで。これでもちゃんと女性用に仕立てているのよ。アシャ兄さまに合わせたの」

「ほう」

アシャはくすぐったくなって、笑みを深めた。

リディノの邪気のない好意が嫌なわけではない。むしろ、他のべたべた甘ったるい女よりは遥かにましだ。だが、アシャ自身、元々は楽器より剣、女より学問、色気には乏しい性格だ。リディノの好意がなまじ罪がないだけに、あしらうにあしらえなくなる。

「あら、立風琴（リュシ）、直ったの？」

「ああ」

「じゃあ、アシャ兄さま、花苑に出てみない？ いいお天気だし、きっと立風琴（リュシ）もよく響くわ」

「悪いけどね、リディ」

ちょっとアシャは相手の額を突いた。

「ユーノが退屈してるだろうから、あいつに聴かせようと思ってるんだ。その後なら.....」

「あら、でも」

リディノは大きな瞳を見開いた。

「ユーノには、今、お客さまよ」

「客？」

アシャは眉を潜めた。

セレドは遠く、旅は長かった。ましてや、ラズーンの四大公の屋敷にまでユーノを訪ねてくる客などあろうはずもない。

先日刺客に襲われたばかりのユーノに、またもや不用心に他人を近づけたのか、そう苛立ちかけたアシャを見抜いたように、リディノはにっこりと笑った。

「大丈夫。『銀の王族』よ。『太皇（スーグ）』に謁見なさっての帰りですって。.....ハイラカ、と名乗っておられたわ」

「ハイラカ？」

アシャはますます訝しく眉を寄せた。

確かに全く知らない相手ではない。『銀の王族』であるのも確か、氏素性も明らかだ。（だが、なぜあいつがユーノを訪ねる？）

しかも、どんな用で。

「ねえ、兄さま」

考え込んだアシャの腕をリディノがねだるように捉えた。

「そんな難しい顔なさないで。たまにはゆっくりした方がいいと思うわ。ユーノが全快するまで、

特別なお仕事はないんでしょう？」

「あ、ああ」

そこまで確かめられては振り切れない。仕方なしに腕を引かれるまま、光溢れる花苑に出た。

花苑は今やラフレスの花盛り、青白い光を宿したような白い花びらが、日中の強い日差しを受けて崩れようとする寸前の身を、かろうじて保っている。甘い香りはピンクのライクだろう。ブーコの羽音は眠気を誘うように、波打つような低い唸りを続けていた。

「ふふふっ」

リディノは花苑の中央でしゃがみ込み、一輪のラフレスを折り取って髪につけ、アシャに笑いかけた。緑の飾り紐に乱れる金髪、真白いラフレスの花。人の心を魅了するに十分な光景だったが、同じその花を濡らしていた紅を、アシャは思い出すともなく思い出す。

この見事で美しく華やかな花苑で、ユーノは屠られ拉致され酷い目に合わされていた。ユーノがこの花々を見るとき、抉られた傷を思わずにはいられないだろう。ましてや、一度はその血を浴びた花を飾るとは思えない。

それでも花は美しかった。

(部屋で聴かせてやろう)

アシャは思う。

(違う花を飾ってやって)

苦しく辛い記憶ばかりを呼び起こさなくても済むように。

(俺の恋歌には、ラフレスじゃない、別の花を思い出すように)

『アシャ』

この詩、好きだ、そう笑う顔が見たい。

脳裏に目を細めるユーノを思い描き、思わず微笑む。

「どう、アシャ兄さま」

「よく似合うよ」

無邪気に笑うリディノにさらりと応え、ふと、その姿の向こうにユーノの部屋の窓が開かれているのを見つけた。

少年が一人、ベッド近くに椅子を引き寄せ、話し込んでいる。その温和な人の良さそうな横顔に見覚えがあった。

(ハイラカ)

様子から見ると、ユーノにとっては苦手な相手ではないらしい。笑うユーノの唇が、何を聞かされたのか、はにかんだように嚙まれるのに、思わず目を見開いた。

(何だあれは)

ユーノが何だか頬を少し染めていないか？

「アシャ兄さま？」

呼びかけられてはっとした。

「.....悪い。何て言った？」

「まだ、何にも」

くすりとリディノは笑みを零した。

「おかしなアシャ兄さま。どうなさったの？」

「いや、別に」

思わずユーノの窓に半身背中を向けた。調弦しながら、

「何を弾こう？」

「そうね.....恋歌を何か一つ。この間ジノに弾いてもらおうと思ったけど、第三弦が切れていたから、だめだったの」

小首を傾げながらリディノはねだった。

「恋歌、な...」

アシャはちらりとユーノを振り向いた。ユーノは気づかず、ハイラカと話し続けている。溜め息をつき、アシャは首を振った。

「わかってるだろう？ 一人の娘のために男が恋歌を詩うのは、ラズーンでは心を捧げる誓いになる。それがわからないぐらい、リディはまだ子どもなのかい？」

宥める口調に、リディノが一瞬寂しそうに眉をひそめた。俯き加減に、もう一本、ラフレスの花を折り取った。

「わかってるわ、もう子どもじゃないもの」

指の間でラフレスを弄びながら続ける。

「でも、アシャ兄さまは、これまで誰にも詩ってあげていないじゃないの。.....アシャ兄さまは、女の人が嫌いな？」

「っ……リディ」

じろりと相手を見やると、リディノは唇を尖らせている。

「だって…」

「俺にだって詩ってやりたい娘ぐらい、いるよ」

「だ……、そ、う」

何かを問いかけて、リディノは思い留まった。ほ、と小さく息をつき、気持ちを切り替えたようにアシャの側に寄る。

「じゃあ、何でもいいわ。アシャ兄さまはずっと旅をなさってたから、珍しい詩もご存知でしょう？」

「珍しい詩？」

「ラズーンでは聞いたことのないような節や詩の」

「……そう、だな」

再びユーノを盗み見たが、相手はやはりアシャには気づかないようだ。

(詩ってやりたい娘ならいる、だが、あいつは俺に気づきもしない)

自分一人が空回りしている気持ちになった。立風琴(リュシ)を抱え直し、弦を鳴らす。

「じゃあ、こういうのはどうだ？」

声を合わせ、調子を整える。

「昔

深き泉の底に

気高き姫は眠っていた」

どこで耳にした詩だっただろう。戯れ詩ではなかったはずだ、哀調を帯びた声が今でも耳に残っている。

「眠りは深く

泉も深く

姫は目を覚まさない」

考えれば、今のユーノに向かうアシャに、これほど合った詩もない、そう気づいて切なくなる。

「ラズーンの雪が泉に落ちる

白きラフレスも泉に散る

そうして待つ身も底に散る」

砕けて散って振り向いてくれるなら、それもまた一興とさえ思えてくる。

「想いの深さにおののいて

姫の心をとらえる者を

あれかこれかと問い惑う…」

アシャの音が甘く震えた。

「ん？」

話を止めて、ユーノは耳を澄ませ、窓の外を見やった。

「立風琴(リュシ)だね」

「…」

ハイラカの声に頷いて、花苑の中に立つアシャとリディノを見つめる。

紫の長衣、同色の飾り紐で髪を後ろでひとまとめにただけでも、目にしみるほど美しいアシャの隣に、深緑の衣で同じような姿をしたリディノが、ほっそりとアシャに甘えるように立っている。まとめ方を変えてはいるものの、アシャより淡い金髪が肩に背に白い額に乱れて、衣の色が濃いだけに一層引き立って眩く見える。

(いいなあ)

胸の中でことばが零れた。

たとえ、アシャに好きだと言ってもらわなくともいい。レアナの妹でも、セレドの第二皇女でも、『銀の王族』という繋がりだけでもいいから、あんな風にアシャに甘える時間が欲しい。ほんの少しだけ、アシャの側で目を閉じて、体を休めたい。

アシャの詩が響いてくる、甘く切なく、遠い夜の昔語りのように。

(そういえば…夢を見ていたっけ)

眠り続けていた五日間、何かとてもいい夢を見ていた。全部が全部いい夢というのではなかったのだが、苦しさが極限に達して、これ以上は耐えられないと心が悲鳴を上げて崩れ落ちていこうとした瞬間、その体を抱きとめてくれた人がいた。驚いて、怯えて、体を固くしたユーノをそっと、けれど逃れようのない熱っぽさで抱き締めて、その人は低く囁いてくれた、ユーノの名前を繰り返して繰り返して、ユーノの心が溶けていくまで。応えなくては、ともがくユーノを黙って待っていてくれた。

その体に包まれて、その腕で体の自由を奪われるほど抱き締められても、抵抗しようとは思わなかった。ただ、泣きたいような安堵感があって、じっとただ、相手の腕に身を任せていた。

(あれは...誰だったんだろう)

妙に生々しく、抱きついた体の感触も覚えている。

(もう一度抱き締められたら、きっとわかる)

安堵とは裏腹の、もっと近くもっとたくさん欲しくなるような切ない気持ちが溢れて、唇を引き締める。

(ひよっとして、アシャ...とか?)

慌てて首を振った。

(ないないあり得ない、どうにかしてる、こんなこと考えるなんて)

「ユーノ？」

「あっ」

ハイラカが怪訝そうにこちらを見つめているのに気づいて、顔が熱くなる。

「ごめん。何の話だっけ」

「.....君はアシャが好きなのかい？」

「っっ」

ぎょっとしてユーノはハイラカの青い目を見返した。

「アシャを見つけてから、そっちばかりを見ている」

「...そうかい？」

一瞬息を呑み、かろうじてユーノはにこりと笑ってみせた。

「そりゃ、ま、ね。だって、レアナ姉さまの想い人なんだから。将来の兄になる人だから、気にもなるさ」

「君の姉の？」

ハイラカは少し目を細めた。

「アシャも、お姉さんが好きなのかい？」

「ああ」

何気なく応えると、胸でセレドの紋章が揺れるのを感じた。

「守ってやりたい女なんだって。一生かけて心を捉えたくなるひとだって、アシャ、ベタ惚れだったんだ。何せレアナ姉さまは、セレドはおろか、他国にも聞こえた美姫だもの.....お似合いだと思わない？」

そうだ、あらゆる意味で、レアナは本当にアシャによく似合う。

「セレドのレアナなら聞いたことがあるよ」

ハイラカは静かに同意した。

「美しくて気品があって...」

「心根優しく、物腰柔らかく。私もずっと思ってきたもの、守ってあげたいって」

ハイラカのことばの後を続け、ユーノは笑みを絶やさないまま続けた。

「姉さまみたいな優しいひとが泣いたり、悲しんだりするのはみたくない。ううん、姉さまだけじゃない、父さまも母さまも、妹も.....セレドの国民も...誰も悲しませたり怯えさせたりしたくない.....私は.....守りたいんだ...」

優しく虚ろな声になっていた。

「ユーノ...」

「あ、それにさ」

ハイラカの気遣わしげな声に、ユーノは我に返った。

「私も剣を扱う方が好きだしね。それに、女の子に見られることが少ないからさ」

ちよいと肩を竦めてみせる。

(アシャにも女の子扱いはされない)

だから期待なんかしない。守られることを願わない。

脳裏を眠るレスファートの顔が掠める。旅で出会った人々の笑顔が、差し伸べてくれた手が、一つ一つ蘇る。動乱の波に呑み込まれていきかねない命との絆がもう、両手に余るほど繋がれているのを感じる。

(だから、守る、皆を)

破滅が近いというなら立ち塞がろう、全身全霊かけて。また、ユーノが傷つくことで悲しむ存在のことも忘れない。その気持ちもちやんと胸に覚えておく。

(覚えておいたまま、逃げないでいる)

難しいことだけど、それでもきっとやれるはずだ、伊達や酔狂で戦い続けてきたわけではない。

(私は、強い)

ああ、そうだとも、だけど、なんだって今日は、わかりきっているこんなことが、これほど心に痛い？

「ユーノ...」

ハイラカは椅子を立て、ユーノの側へ寄った。

「僕は君に何もしてあげられないけど.....少しぐらいなら抱き締められるよ」

「ハイラカ...」

ユーノは思わず目を見開いた。

「いいよ、泣いても」

柔らかな相手の微笑に慌てて取り繕う。

「あは、大丈夫だって。そんな...」

必死に紡いだことばを裏切って、突然涙が零れた。

「ユーノ」

ハイラカがためらうことなく、ぐい、とユーノの頭を抱き寄せる。

「ごめ.....傷が...ちょっと痛くて...」

「うん」

そっと腕を回してくれるハイラカの体に頭をもたせかけ、ユーノは嗚咽を噛み殺した。

「姫の心を溶かすには

どれほど熱い想いがいるのか

どれほど深い祈りがいるのか

泉の側にたたずむ騎士の心は

妖しく乱れてままなら...ず...！」

詩いながら、何気なくユーノの部屋に目をやったアシャはどきりとした。

椅子を立ったハイラカがユーノを抱き締めている。ユーノもまた拒みもせずハイラカの腕に身を委ねている。

「兄さま？」

「あ、ああ」

詩うことを頭からすっぱり放り出しかけたアシャは、促され慌てて続けた。

「.....いつしか泉のほとりで

恋にうかされ

石と化す...」

(くそっ)

俺のユーノに何をしてきている。

焼け付く怒り、荒々しく苛立ちながら最後の音を弾き終わる。

「変わってるわね...恋歌、でもないみたいだし」

「ああ、そうだ。ガズラの古い詩で、昔語りの一つだよ」

リディノの問いかけに上の空で応える。

「ふふ...でも素敵だわ。だって、泉の底のお姫さまを想って、騎士がついに石になっちゃうんでしょう？私もそれほど想われてみたい」

「リディは大丈夫だよ。いつかそれほど惚れる男も出て来るさ」

「そうかしら、嬉しい」

はしゃぐリディノを見つめながら、アシャの目の奥には、さっきの光景が焼き付いている。

(肩が震えていた.....泣いていたのか?)

ユーノはアシャの前ではめったに泣かない。ましてや、あれほど弱々しい姿を見せることなどないのに。

(俺ではだめなのか? おまえを受け止めてやれないのか?)

なぜなんだ? 何が足りない?

「あら...」

が、アシャの思考はそこで断ち切られた。

花苑の端から一人の男が走り出してくる。『銀羽根』ではない。しかも、相手はまっすぐにこちらに走り寄りながら呼びかけて来た。

「アシャ！」

「何だ」

ミダス公の客人として滞在している彼に、これほど早急に接近してくる相手は刺客か密使に限られている。側にリディノがいるのは一目瞭然、なのに呼びかけて来たことに眉を寄せた。

「すぐにおいでを! ギヌア・ラズーンの一行が『泉の狩人(オーミノ)』の所へ向かったと『羽根』から知らせがありました！」

「何っ」

今この時期に、『運命(リマイン)』が『泉の狩人(オーミノ)』に接触してくる理由は、おそらく一つしかない。

「すぐに行く！」

アシャはリディノに立風琴(リュシ)を渡し、走り出した。

「ごめん...」

ユーノは、ぐい、とハイラカの体を押し離れた。

「...どうかしてるんだ、今日は」

「君は女の子なんだから...」

ハイラカは抵抗することもなく椅子に戻り、優しく微笑んだ。

「もっと人に頼ることを覚えてもいいと思うよ」

「そう、だね」

笑み返しながら、ユーノは心の中で応える。

(でも、そうしていたら、きっと私はもっと多くの人を巻き込んで死なせていた...)

体に残っている傷痕がその証だ。まだ、アシャだったから、イルファだったから、自分の身は自分で守れ、しかもレスファートまで守る力を残している二人だったからこそ、仲間として側に居られた。

(もし、ハイラカ、あなただったら、私はきっと巻き込まないようにしただろう)

ハイラカは『銀の王族』、それとは知らずに守られることに慣れて来た人間なのだ。『運命(リマイン)』に出くわせば、ひとたまりもない。

(え?)

ふいに、ユーノは自分の考えたことにびっくりとした。

(そうだ.....無意識に守られてきた人間.....『銀の王族』.....だけど、私は)

覚えている限り、そういった保護を感じたことはない。それどころか、幾度も幾度も死の危険に自分を晒して生きて来た。

(性分だから? 守りたかったから? ううん、そんなことで破れる掟なら、特別な力を持たない『銀の王族』が生き残って来たはずはない。だって、『運命(リマイン)』は、私達が旅に出る前からラズーンに歯向かい出していたんだし)

それを言うなら、本来ならカザドに対しても、セレド皇族は『銀の王族』として手出しできない存在として『条件付け』されていたはずではないか。

「どうしたんだい？」

「あ...ううん...何でもない」

答えながら、ユーノは妙な違和感を覚えた。

(どこか変だ.....どこか、おかしい)

『氷の双宮』から帰って来た夜、寝付けぬままに考えていたことが、心の中でもやもやと固まり始める。

(来訪者が、そこまで素晴らしい力を持っていたなら、どうして二百年ごとの狂いをどうにかしなかったんだろう。狂い自体をどうにもできなかったとしても、何とかそれまでの安全な期間を伸ばすとか、別の再生方法をもたらすとか、狂い始めたら『銀の王族』が集まるまで装置を止められるようにするとかしなかったんだ?)

ユーノでさえ思いつく疑問に眉を寄せる。

(いや、それより前に、生命を再生するほどの力を持っていた前の世代の人々は、『種の記憶(デーヌエー)』の狂いを予想できなかったんだろうか? ほんの少しのずれでもずれはずれだ。気づかないにしては、あまりにも大きな問題じゃないか)

現に、その『ずれ』のために、『氷の双宮』に生き残っていた人々は、お互いに殺し合って滅びてしまった。来訪者が来なければ、この世界は死に絶えていたかも知れないのだ。

(ほんの僅かな偶然が重なって、やっとこの世界は回復したのか?)

自らの滅ぶ先を見据えて、その先へ新たに命を繋ごうとした人々がすぎるには、あまりにも細すぎる糸のような気がする。

(ならば.....どういうことなんだ?)

ユーノは目の前のハイラカに意識を戻した。

「ハイラカ」

「ん？」

「あなたも『銀の王族』として、『太皇(スーグ)』に謁見したんだよね？」

「うん」

相手は呆気にとられたような顔で頷く。まじまじと見つめる瞳は、ユーノの顔とそこに現れた何かを読み取ろうとするような表情、やがて茫然とした驚きの顔が次第に妖しい惑いにためらうような顔になる。ユーノをじっと見つめながら、ハイラカは何かを待ち望むように、軽く首を傾げ、身を乗り出した。

「その時、どんなことがあったの？」

「...どんなこと、って」

ユーノの問いに、ハイラカはゆっくりと瞬きした。夢に落ち込もうとしていたのを堪えるように、軽く唇を噛み、低い囁きで応じる。

「いずれ...わかるよ」

「今、知りたいことがあるんだ」

「...わかった」

何を聞きたいのか、よくわからないけど。

ハイラカはそう前置きして話し出した。

「イシュトに連れられて、あの白い壁の中に入っただろう？ それから『氷の双宮』の右の宮に入って、僕は『太皇（スーグ）』に謁見した。『太皇（スーグ）』は中央の玉座におられて、純白の衣に白髪、長く白い髭のご老人だった。『太皇（スーグ）』が合図されると、イシュトが姿を消して、やがて物憂いような音楽が聞こえてきた。立風琴（リュシ）じゃないし、弧管（クート）の音色に似てたけど、それでもなかったな。その音楽に埋もれるように、『太皇（スーグ）』の声が聴こえてくるんだ」

「埋もれるように？」

ユーノはより眉を寄せた。

（何だろう、何か、ひっかかる）

「ああ。音楽と入れ替わるようにふっと聞こえてきては、ふっと遠ざかるんだ。それからしばらくの間、『太皇（スーグ）』は僕にいろんなことを話して下さったよ。ラズーンの成り立ち、『銀の王族』の意味、視察官（オベ）のこと、『運命（リマイン）』のこと……昔語りによく聞かされたようにね」

「……どんなふうに？」

ユーノは遮った。昔語りのように、というのが気になる。

ハイラカは奇妙な顔をしたが、自分を励ますように一つ頷いて、話を続けた。

「普通の話だよ。昔、東西の神々の争いがあった、地上が滅び、魔と荒廃の支配する世となった。わずかに生き残っていた賢人達は、生命（いのち）の種を保って、ラズーンの性のない神が目覚めるまで地下にいた。その後、ラズーンの性のない紙が目覚め、世に生命（いのち）を送り出し、そうして世界は回復した。だが、平和な世に疑いの芽が伸び、世を治める者としてつくられた『太皇（スーグ）』の下の視察官（オベ）と『運命（リマイン）』の間に争いが起こり、『運命（リマイン）』は自分達こそ世を治めようとして暗躍するようになった。『銀の王族』とはラズーンの歴史を覚えているもので、歴史は繰り返すという古い伝えの通り、その歴史を聞けば未来の予見も叶う。そのため、ラズーンは『銀の王族』を集めるのだが、ラズーンを滅ぼそうとする『運命（リマイン）』にとっては、『銀の王族』はラズーンを長らえさせる邪魔な因子に他ならない。よって、『運命（リマイン）』は『銀の王族』を狙い、太古生物を復活させては、この世を脅かす。諸国の動乱は、今その『運命（リマイン）』の暗躍によるものなのだ……」

ハイラカは覚えたものを暗誦するように一息に語った。それからふと、我に返ったように、

「ユーノ？」

「あ…うん……何でも、ない」

歯切れの悪い返事に、ハイラカは訝しそうに瞬きする。

「それならいいけど……そうか、君は半分しか洗礼を受けていなかったんだね」

ゆっくりと笑う。

「じゃあ、今の話はずいぶん突飛な話に聞こえてしまうだろうなあ」

口調に微かに誇らしげな、大人が子どもに苦笑するような気配が混じった。

だが、ユーノはなおも問いを重ねた。

「……それで？」

「え？」

「それで、その後は何があるんだい？」

「ああ……それから、『太皇（スーグ）』が僕の国の様子や、世界のことをどう考えているか、どんなふうに聞いているかについて尋ねられたよ。答えられる範囲でいいとおっしゃったから、思うままに答えていたけど…」

ハイラカがふと、ことばを濁した。

「その…実はね」

ユーノの困惑に気づいたのだろう、照れくさそうに淡色の髪をかきあげる。

「『太皇（スーグ）』がこの世の成り立ちや『銀の王族』なんかについて話して下さったことはよく覚えているんだけど、その後、『太皇（スーグ）』がいろいろ尋ねられたあたりから、どうも記憶があやふやなんだ。何かこう、頭の中に白い霧がかかってきて、一所懸命、それを振り払って答えようとするんだけど、だんだん身動きとれなくなってきた……こともあろうに、僕はそのまま眠り込んでしまったらしいんだ」

「眠り込んだ？」

「たぶんね」

ハイラカは考え込んだ目の色になった。

「僕は夢の中でも答えを探していた気がするよ」

ほ、と小さく吐息をついた。

「『太皇（スーグ）』が尋ねられることが、だんだん難しくなってくるのがわかるんだ。それに対し

て、僕は必死で考えなくちゃならなかった。いや、考えるというより、思い出そうとする、と言った方がいいかもしれないな。……でも、それもひよっとしたら全部夢だったのかも知れない。目が覚めたら、『氷の双宮』で白いシーツをかけられたベッドの上にいるから」

「ふうん…」

「側には同じようにベッドに寝ている人が居たよ。『銀の王族』だとイシュトは言っていた。洗礼の後には、いつもこんな風に眠り込んでしまう人が多いとも言っていた。『氷の双宮』は、言い換えれば命を眠らせておく宮だから、その眠りの呪文が、僕ら…視察官（オペ）や『太皇（スーグ）』以外の者には強く効いてしまうんだとも説明してくれたよ。僕は、『太皇（スーグ）』にどのようにお返事したのかよく覚えていないけれど、イシュトは、馬鹿なことや無作法な振舞いはしなかったって教えてくれた……ほっとしたな」

『太皇（スーグ）』に会ったことを思い出して、わずかに興奮したように見えるハイラカを、ユーノは正面から見つめた。

彼は全く嘘を言っているようには見えない。むしろ、自分の体験した未知の出来事を、出来る限り丁寧に正確に話そうとしてくれたように思える。

けれど。

（本当だろうか）

ユーノの胸にはそんな声が聞こえてくる。

例えば、ラズーンの成り立ちだ。

確かに昔語りとはほぼ同じで、野戦部隊（シーガリオン）のユカルが話してくれたこととも重なる。その限りでは、間違っているとは言えない。

だが、ユーノの頭の中にあるラズーンの成り立ちは、ハイラカが語ったものとは、少し様相が違っている。

まず、ハイラカの話では、来訪者については一言も触れられていない。その気配の片鱗もない。来訪者がいないから、賢人達が自滅してしまったことの件（くだり）もない。

『銀の王族』が未来を語ると言われるのは、その脳の中の世界の記憶と体にある『種の記憶（デーヌエー）』によって、『氷の双宮』にある世界の記憶と『種の記憶（デーヌエー）』を新たにするためであり、未来を『語る』のではなく、未来を『生み出す』もとなるためだ。

また、『運命（リマイン）』が『銀の王族』を狙う目的は同じであっても、そのために太古生物を復活させたというのは大きな違いだ。

確かに『運命（リマイン）』は諸国の動乱を引き起こし、人々の間に争いを生むことができるが、太古生物はラズーンの『氷の双宮』での『種の記憶（デーヌエー）』の狂いからくるもので、その点においては、同じように『種の記憶（デーヌエー）』の狂いから生まれた『運命（リマイン）』に太古生物を復活させることができるわけはなかった。

（どうして食い違ってるんだ？）

ラズーンにのみ伝わるといって『創世の詩（うた）』をジノから聞いたことがある。あれは、ユーノが覚えている方に近かった。

（待てよ？）

そこでふと、ユーノはジノがいくさり詩った後で、正式にはもういくさり、詩があるのだと言っていたのを思い出した。

（ひよっとして…）

「ハイラカ」

「うん？」

「悪いけど、ジノを呼んでくれる？ 聞きたい詩があるって」

「わかったよ。じゃあ、僕はこれで」

ハイラカは唐突なユーノのことばに気分を害した様子もなく出て行った。

しばらくして、相も変わらず深草色の衣服をつけているジノが入ってきた。側にリディノとレスファートが従っている。

「聞きたい詩があるんですって？」

リディノが笑いかけてきた。

「私達も聞いていていいかしら」

「構わないよ。アシャは？」

「それが...」

リディノは眉のあたりを少し曇らせた。

「さっき、使いの者が来て、急に出て行ってしまったの。ひどく怖い顔をして、『泉の狩人（オーミノ）』がどうか言っていたけど」

「『泉の狩人（オーミノ）』？」

「もうあの人とのお話、終わったの？」

レスファートが甘えた口調で口を挟む。

「ああ。こっちに乘っていいよ」

「うん」

（ハイラカに悪いことをしたな）

嬉々としてベッドに這い上がって来るレスファートに手を貸しながら、後で謝ろうと思う。

「じゃあ、私も」

リディノが深緑の長衣の裾を整えてベッドの裾の方に腰掛け、ユーノを見つめる。

「それで、何をジノに詩わせたいの？」

「『創世の詩（うた）』を。この前聴いた後に、正式にはこの後にもう一くさりあると言ってたと思うんだけど」

「ジノ？」

「はい、その通りでございます」

ジノは例によって扉近くに腰を降ろし、立風琴（リュシ）の弦を合わせながら答えた。アシャがリディノに預けていったものだ。

「この前詩いました『創世の詩（うた）』は、どなたでも詩われるものですが、その後のものは代々の詩人（うたびと）にしか伝わっておりません。また、これは、ご所望があっても、その場に『銀の王族』がいらした場合には詩うことは叶いません」

ジノは目を伏せて淡々と拒んだ。

「『銀の王族』には聴かせてはいけないの？」

リディノの驚いたような声に頷き、

「そのように、『太皇（スーグ）』からのお言い付けでございます」

ジノは軽く頭を下げた。

「どうするの、ユーノ」

「それでも、私は聴きたい」

ユーノは唇を噛んだ。是非聴きたい、いや聴かねばならない、そう思いが募る。

「もし、『銀の王族』であることが問題なら、『銀の王族』としての特権も資格もなくしても構わないから」

通常の『銀の王族』ならば、そんな望みはすまい。自分が今まで知らずに受けていた安寧と平穩、それを引き換えにただの詩を聴きたいなどとは。

「.....昔、『太皇（スーグ）』がおっしゃられたそうです」

ジノは微かな笑みを唇に浮かべた。少年のような面立ちが、一瞬柔らかく綻ぶ。

「幾世代前の詩人（うたびと）には存じませんが、もし、万が一、『銀の王族』であることの意味を知って、それでもなお、それを捨てても聴きたがるものがあるならば、その時にこそ詩うべし、と.....私の代に巡ってくるとは思いませんでした」

何度か思わげに立風琴（リュシ）の弦を弾く、本当に口に出すべきなのか、本当にことばという形に紡いでいいのかとためらうように。そうすることで、巨大な力を解き放ってしまわないかと恐れるように。

がしかし、逡巡は一瞬だった。

ふと目を上げ、ユーノを見つめ返す。そのまま、第一弦、第二弦、第四弦、第五弦と鳴らして、第一弦の押さえ方を変えて六音を、第二弦の押さえ方を変えて、より高い七音を鳴らした。曲を奏でながら、六音と七音を、遊ぶように曲にちりばめていく。その二音は絡まり合い、連なり合って、やが

て一つの音として時を刻み始める。

「...こは、創世の詩（うた）

もう一つの白き面（おもて）

人の語らぬ創世の詩（うた）.....」

長い物語を語ろうとするように、柔らかく穏やかにジノは詩い出した。

「...彼の夜（よ）

星の降り立つ夜（よ）

その夜過ぎこし

はるか昔

東西の神々の戦いに

世をつながんと空しき望み

生命（いのち）重ねる宮の者

しかしてあわれ

知るよしもなし

生命（いのち）重ねるその果てに

まつ絶望のおそろしさ...」

詩は急調子で畳み掛けられた。

「宮にこもりし者どもあわれ

あわれと思えど術（すべ）はなし

ついに狂いて

身を滅ぼしぬ

深き闇よ

嘆きの夜よ...」

コン、と指で立風琴（リュシ）を叩き、固い音をたてて、ジノは詩を止めた。口を噤む、闇の深さを示すように。声をたてることさえ叶わない嘆きの重さを知らしめるように。

やがて、恐ろしいほどの沈黙の後に、そっと優しく七音を紡ぎ出し囁き出す。

「...あわれかな

あわれかな

滅びはすでに

予見された

古き伝えは語りつぐ

滅びを見こして

生命（いのち）はつむがれ

重ねられたとは

詩人（うたびと）のことば...」

ユーノはぎくりと体を強張らせた。

（滅びを見越して.....命は紡がれ.....重ねられた...）

そのことばは、ユーノの心に漂うもやもやしたものを燻すように微かな火を点けた。

「...人の命ははかなし

しかして

人の造る命はなおはかなし

古き伝えの祈りのことば

天に生まれ

地に育ち

緑はぐくむ命の糧は

人の手にてははぐくみがたし

そはいつか

二度と命をつなげまい

おそれが賢者を導く

沈黙の岩戸へ

深き湖の底へ

かくして

賢者、口をおおいぬ

定められた日来たるまで

すべての罪は我にあり

大いなる自然に叫びつつ...」

七音に六音が混ざり込み、やがて、その他の音も入り交じって、嵐のような激しさでかき鳴らされた。口を覆ったという賢者の傷みを掻き立てるように、七音がますます高く、いよいよ強く鳴り響く。が、それらは唐突に消えた。激情の嘆きで終わったのかと思いきや、ジノがそっと口を開く。

「かくして

ラズーン

二百年の祭りの定めを背負いたり

その定めのある限り

賢者の悲しみ

消えることなき、夜の果て

伝えは語りぬ

はるかな未来.....」

ジノの声だけが、立風琴（リュシ）の音の消えた空間に淡々と響いて再び消えた。

窓からそよそよと吹き込んで来ていた甘い香りの風も、その緊張感を壊すのを恐れたように止まっている。

「.....」

空気が凍てついたように動かなくなった。

ジノの唇はいつ終わるとも知らぬ沈黙を保っている。立風琴（リュシ）の残響も既に消えた。部屋の隅に音は身を潜め、沈黙の重さがいや増してくる。

「.....」

緊張感が極に達すると思われた時。

「っ」

ジノの指が突然六音を弾いた。

びくりと体を強張らせる聴き手を半眼にした目で一瞥して、ジノの指先は一瞬七音を混ぜる。が、再び七音は、遠い夜語りの幻想のように消えていく。それに伴って、時を刻んでいた六音も次次第に響きを潜めていく。

再びの時を願う愚かさを嘲笑うかのように、人の命では量れない悠久の時間の長さが音の焼失で語られる。

一呼吸置くか置かないか。

第一弦、第二弦、第四弦、第五弦の音が柔らかく交差した。

ジノは目を閉じ、体を少し前に倒す。さらさらと、深草色の布から垂れた黒髪が軽い音をたてて流れる。

（この音律は）

気づいてユーノは目を上げた。それを待っていたかのように、ジノはぴんと声を張って詩い出した。

「...ラズーンは

失われた都

枯れた泉

死して飛ばぬ人の夢

すべての栄えがさもあるように

永遠に続く栄えはない

いつしか

美しきこの都も

朽ち果て

大地の上に横たわらん

しかし、世は続く

人の命は続く...」

それは『創世の詩（うた）』の後半部、どこか祈りに似た切なさを感じさせる詩の繰り返しだ。ただし、ジノの声は、昔語りの長の声音にも似て、あくまで淡々と響き、どれほど待っても、この前のように熱を込めて燃え上がりはしなかった。

その代わり、声は次第に澄み渡り、高く立ちのぼり、細く儂い命の糸を紡ぐように、ひたすらな一途さをたたえ始める。

「死が人の運命なら

生も又人の運命

ラズーンは滅び

失われた都となる

『運命（リメイン）』は跳梁し

闇は人々の心に巣食い

動乱は世を暗くする…」

(歌詞が違う?)

ユーノは目を見開いた。

その詩は、この前の『創世の詩(うた)』との違いをあからさまにするように、訪れる重い闇を語っている。続いたことばにユーノは思わず体を震わせる。

「滅びは定め

世の始め

星の降り立ちし夜より

ラズーンの祭は

その身に課せられてあり…」

「！」

(滅ぶのが定めだと……では……やはり…)

ジノの詩(うた)は感情を含まないまま、静かに紡がれる。

「しかし

再び創世の時は来たり

その時

世は人の命を紡ぎ

人は命の綾を織りなし

手をつなぎ

心を結び

慈しみあい

愛しあい

命の綾は世を生まれ続けさせるのだ………」

ジノの声は、無感情な底に、深い哀しみと祈りをたたえていた。

消え入るように立風琴(リュシ)の音が薄れていく。

人よ、と聞こえない声が願っている。

人よ。

戦いを望み互いを滅ぼしあう人よ。

幾度となく命を途絶えさせる数々の欲望を抱えた人よ。

しかしまた、その底に、たった一つの命を守ろうとする願いを保つ人よ。

動乱の波に呑み込まれるな。

憎しみの炎に焼き尽くされるな。

断崖絶壁に追い詰められ、千尋の闇に背中を向けて立っても、愛おしいと笑うがいい。

襲い来る絶望、破滅の未来、それでもなお、明日を夢見るがいい。

その魂の煌めきにこそ、永遠の花冠は与えられる。

どれだけの滅びがあろうとも、命は続く。

それを私は知っている。

「……」

「リディ？」

「ごめんなさい…」

リディノの頬を光るものが滑り落ちていくのに気づいて、ユーノは声をかけた。はっとしたようにジノが体を起こす。

「姫さま?!」

「わからないの……わからないけど、胸が痛くなってきてしまって……何という祈りなのかしら……何という想いを……この詩(うた)に託したのかしら……」

ぼろぼろ零れる涙を指先で拭いながら、リディノが呟く。立ち上がったジノが、リディノの足下に跪いて、心配そうに彼女を見上げる。

「ユーノ…」

滲んだ声で呼ばれて振り返る。

「どうした、レス？」

「わかんないけど…」

レスファートもまた、潤んだ目でユーノを振り仰いだ。

「ぼくも泣きたい……けど……こわくて泣けないよ…」

不安が瞳の薄青を覆っている。そっと伸ばした手でユーノの服を掴んでいる。

その手を優しく外してやると、レスファートはびくりと体を震わせ、ユーノを見つめた。

「ユーノ？」

「怪我してる方の手だろ。痛くないの、レス」

「あ...うん」

「ほら。しがみつくのはこっち」

「ユーノ！」

ほとんど吐息だけの声で叫んで、レスファートはユーノに体を投げた。その小さな体を左手を回して包んでやりながら、静かに問いかける。

「大丈夫だよ。何が怖い、レス」

「何か.....わかんないけど、こわい.....こわくてかなしい.....」

レスファートはユーノの胸に顔を押し付けながら呟いた。

おそらく、レスファートは、持って生まれた恵まれた資質で、詩（うた）に込められた想いをそのまま受け止めたのだ。

（もし、私の考えている通りだとしたら）

ユーノはリディノを慰めているジノを見つめた。

（賢者は何と儂い祈りにかけたのだろう.....一体どんな想いで、遥か未来の子ども達を思ったのだろう）

ユーノの心にも、淡い憂いが広がってきつつあった。

4.失われた都より

「ふ、う...」

アシャは疲れ切ってベッドの上に身を投げ出した。乱れた髪を額からかきあげる。暮れかけた日差しが窓から差し込んで来ているのを眩く見て、目を閉じた。

脳裏にさっきの出来事が蘇ってくる。

「お前か？」

「はい、アシャ・ラズーン」

会見用の個室で待ち構えていた男が深々と頭を下げ、片膝を突いて跪いた。男の髪は濃い灰色、耳に鈍い赤色の耳輪をつけている。

「『銅羽根』のグードスです」

「グードス？ アギャン公の世継ぎだな？」

「はっ」

男は大柄な体を竦めた。骨張った長めの手足を僅かに縮める。

「ギヌア・ラズーンの一行が『泉の狩人（オーミノ）』の所在へ向かったというのは本当か？」

「はっ」

グードスはますますかしこまり、アシャを見上げた。父親によく似た灰色の目に必死の色をたたえている。

「確かに私は、ギヌア・ラズーンの一行が、我らの領地である土地を横切り、『狩人の山（オムニド）』へ向かっていくのを目に致しました。一行はおよそ二十騎、いずれも長期の旅支度で、おそらくは『泉の狩人（オーミノ）』のもとへ向かったと思われま

す。面長な顔に苦渋が浮かんだ。

「しかし、信じて下さるでしょうか、アシャ・ラズーン」

「何をだ」

アシャは厳しく相手を見つめたまま問いかけた。

「我ら『銅羽根』は、代々のアギャン公より、又『太皇（スーグ）』の命により、東門を守り始めて幾世代か過ぎております。しかし、少なくとも、私が長になってからは、ただの一度も、東門の侵入を許した覚えはありません」

絞り出すような声音、グードスも自分の目で見たとはいえ、起こった出来事の理解に苦しんでいるのだろう。

「待て」

アシャは相手の話を遮った。

「今お前は、ギヌアが『泉の狩人（オーミノ）』のもとへ向かったようだ、と言ったな？」

「はい」

苦い表情でグードスは同意した。

「それに、アギャン公の分領地を横切り、とも言ったな？」

「はい...」

嫌々応じるように、相手は頭を垂れた。

「それなのに、東門の侵入は許していない、と？」

「はい」

振り切るように目を上げる。灰色の目が重く翳りながらも、何としても自分の務めを果たそうと決意したかのように、強い光を帯びた。

「信じて下さるでしょうか。私は『銅羽根』の名誉を重んじて、こうして単身使いに参ったのです」

「だが」

アシャは静かに問いつめた。

「他のどこからも、門を破られたという訴えは来っていない。ラズーンの外壁が途切れるのは中央部の背後に聳える『狩人の山（オムニド）』の裾だ。『狩人の山（オムニド）』側から入るのはまず不可能、壁が途切れる部分も物見（ユカル）の塔からはよく見えるはずだ」

「存じております」

グードスは苦しげに唇を噛む。

「ということは」

「しかし、アシャ・ラズーンよ！」

きっと顔を振り仰いで、相手は訴える。

「我ら『銅羽根』は、決して東門の守りを揺らがせたりしておりません！」

アシャは無言でじっとグードスを見つめた。

ラズーン四大公のうちの一、東のアギャン公は病弱で、世捨て人同然の暮らしをしていると聞く。何でも、ラズーンの未来を憂えて、分領地を治めることは治めているが、ラズーンの『太皇（スーグ）』に対する忠誠は薄いとも言われている。

ギヌアがよりよいラズーンの未来展望を話してアギャン公を説得したとすれば、東門の『銅羽根』とやりあうことなく、ラズーン内に侵入することも可能だろう。

（だが、グードスのことばに嘘の匂いはない）

「...わかった」

アシャは吐息とともに頷いた。

「そのことは後に判定しよう。今ここでは『銅羽根』の責任を問うまい。それより、ギヌア一行の方を何とかしなくてはな」

「はっ」

不満が残ったものの、ややほっとした顔になって、グードスは頷いたのだ。

（一体どうやって、ギヌアはラズーン領内に入れたんだ？）

アシャは眉を寄せる。

（アギャン公の裏切り.....グードスも実は嘘をついているのか？ それとも、アギャン公だけが裏切っていて、息子には知らせずにギヌア達を招き入れたのか？ あるいは、他のどこかの門が破られていて、その持つ意味の恐ろしさに『羽根』が報告してきていないのか？）

いや、とアシャは考え直した。

（『銀羽根』の長シャイラにせよ、『金羽根』のリヒャルティ、『鉄羽根』のテツツェも、自分の仕事に誇りを持っている）

あの『銅羽根』のグードスにしたところで、きっと今度のことと、セータ・ルムが裏切り者として捕らえられたと耳にして、慌てて弁解に現れたに違いない。

（セータは東門から入ったと白状したからな）

数日前、アシャはセータを少々手荒に詰問し、彼が東門から『銅羽根』の守りを受けて入ったこと、ギヌアの配下としてラズーンを裏切り始めたのが、最近のことであることを聞き出していた。

『ふと、視察官（オベ）の仕事が空しくなったのだ』

セータはそう呟いた。

世界のあちらこちらから、お人好しで無邪気で苦労知らずの『銀の王族』を守りながら、長く辛い旅をしてようやくラズーンへ辿り着いたところで、待っているのは、冷たく謎めいた『氷の双宮』だけだ。責務を全うしても、褒め讃えられることも、ましてや崇められることもなく、洗礼が終わればまたすぐ、『銀の王族』を連れてラズーンを離れ、その故郷まで送り届けてやらなければならない。

時に、洗礼を受けた『銀の王族』は不安を募らせ不安定になる、それを宥めながらいなしながら、故郷へ連れ戻してみれば、無事に連れ帰ったことへの感謝よりは、出立前と人が変わったように思える身内への苛立ちが視察官（オベ）に向けられる。一体何があったのかと穏便懇懇に問いただされても、答えようがない。訝しげな視線に追い立てられるように再び、次の使者に立つだけだ。

その、地道で苦しい旅に、どんな報いがあるのか.....何もありません。

世界はいつもと変わりなく続き、世の誰も、その世界の安定を支えるために命を落とし、苦労を重ねる視察官（オベ）のことなど知りたくない。知らないからこそ、思いやることもない。

世界が平和に続いているから、だ。

ならば、一度、この世界を崩壊させてみてはどうなのか。

そうすれば、人々は改めて、自分達がどれほど危うく脆い世界に暮らしているのかを知るだろう。そして、それを支えていた力、自分達視察官（オベ）のことにも気づくだろう。

そこで初めて、人は己の生について考え、視察官（オベ）に正しい敬意を向けるのではないか。

『それは一つの目覚めではないのか、アシャ・ラズーン』

セータは疲れ切った顔で呟いた。

『人々をよりよい生活へ、よりよい日々へと歩ませる、正しい教導なのではないか』

声高に語られるのではない、しみじみとした実感に裏打ちされたことばは、その理論がどれほどセータの内深く強く根を張っているのかを思わせた。

厳しい職務、終わらない任務、それに比してあまりにも少ない評価が、自信を失わせ、セータを疲れさせた。少しでも某かの成果を手にしたと思う欲望が、ささやかな釣り合いを保っている世界を転覆させてみたいという誘惑に引き寄せられた。

崩れた均衡を戻すことは、人の力ではできないものだとわかっているはずなのに、誘惑に堕ちたその後のことを考えない、思考停止がこの手の罠の常道だ。

『では、お前は どうするんだ？』

『え？』

『人々が目覚め、よりよい生活とやらに向かった後、お前は 何を するんだ？』

お前にとっても無論、よりよい生活が待っているのだろう。それは如何なるものか、教えてくれ。皮肉なアシャの声に、セータは戸惑ったようにきよろきよろと視線を動かし、やがて静かに目を伏せた。

『わからない...』

『もう、視察官（オベ）ではないはずだな？ ラズーンはもうないのだから、視察官（オベ）も不要だろう』

『ラズーンが、ない？』

驚いた顔は、世界の転覆を謀りながら、ラズーンという自分の基盤が失われることは考えていなかったと告げている。

『考えろ、セータ』

アシャは冷笑した。

『ギヌアはラズーンを支配すると言ったのか？ では、ギヌアは、お前の言う、危うく脆い世界が崩壊した後に、このラズーンがどこまでどんな形で残っているのかについても話したんだろうな？』

ギヌアは知っている、『運命（リマイン）』が世界を覇した暁に、おそらくは今生きている『人』は存在しなくなることを。

だが、それをセータに語ってはいない。

世界の崩壊が起こった後に、目覚める者は『人』ではない、『運命（リマイン）』と太古生物のみ、もちろん、そこにセータの生きる場所など、ない。

『アシャ、私は...』

『お前は？』

『わたし、は...』

セータの瞳が虚ろに光を失った。

『わか、らない』

『わからないのか？』

では、想像もできない、美しく正しい未来のために、お前はこれからも働くのだな。

『アシャ.....私は.....私は...』

セータは嗚れた声で尋ねた。

『間違った、のか？』

『自分で考えろ』

言い捨てて、アシャはセータから離れた。禁固は命じたが屠ってはいない。
(屠るにさえ価値しない)

振り回されただけなのだ、ギヌアの語る幻に。

だが、セータのように考えるものはいないと、誰が言えるだろう。

そしてそれは、ラズーンの四大公でさえ例外ではない。

(特に、ラズーンの在り方に絶望しているアギャン公なら、不思議はない)

アシャはごろりと体を動かし、脚を組んで立てた。両肘を曲げて頭の下に敷く。

第一正統後継者ともあろう方が、何と言う子どもじみた姿をなさるんです。

昔よく詰られた癖だが、思考を詰めていくのにはいい。

アギャン公の裏切りについてはもう少し後でも手が打てる。

今早急に片をつけなくてはならないことが二つ、ある。

一つはギヌア一行をどうするか、だ。

(『泉の狩人（オーミノ）』.....)

苦い顔で考える。

『泉の狩人（オーミノ）』はラズーン側でも『運命（リマイン）』側でもない。独自の規律と信念に従って動く一族で、彼らを生み出したラズーンからの命令と言えども安易に聞き入れはしない。

ラズーンを保ってきた『太皇（スーグ）』に対しては多少の敬意を払うが、だからといって、『太皇（スーグ）』に、彼らが一旦決めたことを覆させるほどの影響力はなかった。もちろん、現在、ラズーンを囲む諸国の動乱の中で『銀の王族』の洗礼を続けている最中、『泉の狩人（オーミノ）』の説得のためとは言え、『太皇（スーグ）』がラズーンを離れるわけにはいかない。

(かといって、ギヌア達が『泉の狩人（オーミノ）』に接近することを見過ごすわけにはいかない)

巨大な力を持ちつつ、世の動乱に関わろうとしない『泉の狩人（オーミノ）』は、既に虚ろな世界

に飽いている可能性があり、そこをギヌアが突くことができたなら、『泉の狩人（オーミノ）』達は『運命（リメイン）』側に組みするかも知れない。

（そんなことになったら）

ラズーン側にどれほどの勝機があろう。

ここは誰かがラズーン側の使者として出向き、こちらに味方するのは無理でも、少なくとも中立を守らせるように働きかける必要がある。

だがなまじな者では会見も果たせない。

もう一つはユーノのことだ。

（あいつを放っておけない）

どれほど怪我をしようと、どれほど死にかけようと、ユーノの無茶は止まらない。あの情熱とあの剣の才能で、次々死地へと飛び込んでいってしまう。

できればアシャが側に居たいが、『泉の狩人（オーミノ）』への遣いとしてアシャ以外の人材が見つからない今、アシャ自身が使者にたつしかない。

問題はアシャのいない間、ユーノが大人しくしてくれるかということだ。

（『銀の王族』として洗礼を受けている間はいい。その後だ）

ラズーンの内情を知れば知るほど、ユーノはきっと事の矢面に立ちたがるだろう。リディノのように守ってくれる者の背後に逃げ込んでほくれない。野戦部隊（シーガリオン）に戻るか、『銀羽根』に混じって戦うと言い出しかねない。受け入れる方も、名高い『星の剣士（ニスフェル）』がユーノであると知れば、ためらうことはないだろう。

（だから困るんだ）

アシャは眉を寄せて深々と溜め息をついた。

（もう少し、女の子として自覚してくれないと）

『銀の王族』の癖に、どうしてあそこまで危ない目に遭いたがる。

（……やはり、そうなのか？）

唇を噛んで身を起こす。

『目覚め』ということばが頭の中で大きく響く。セータのことばが重なる。

一度崩壊してみれば、人々は自分達がどれほど危うく脆い世界に暮らしているのかを知るだろう。そこで初めて、人は己の生について考える……。

それはセータの使った意味とは別の意味合いで、アシャにはなじみ深いものだった。

ラズーンにおける『滅亡の必然性』。

『失われるべき』都、ラズーン。

代々の正統後継者の資質を持つものだけが知る、ラズーンの隠された意図。

（今がそうなのか？）

旅の途中で無意識のうちに吐いていたことばが真実だったのかもしれない。

『銀の王族』なのに、『どうして』ユーノだけが傷つく？ 執拗に狙うカザドと『運命（リメイン）』の攻撃に、『どうして』この子だけが晒される？

守られるべき『銀の王族』。他の者への条件づけによって、世の幸せを約束された『銀の王族』。

なのに、狙われ、傷つく、ユーナ・セレディス。

（だから、ギヌアは今回の二百年祭を、ラズーン崩壊の時、『運命（リメイン）』が覇権を握る時と考えたのか？）

確かに、ギヌアはかつての正統後継者だ。ラズーンの成立自体が含んでいる大いなる賭けにも気づいていたからこそ、選ばれたのだ。そのギヌアが敵として『運命（リメイン）』に降りた時、当然、その知識も利用されたはずだ。

始めは一人の『銀の王族』から。

かつて『太皇（スーグ）』はそう話していた。

滅ぶべきラズーンの証は、『銀の王族』から始まるだろう、と。

「くそっ！」

アシャは口汚くののしった。

（何も、あいつでなくとも！）

ならば、ユーノが狙われ傷つくのは当然だ、世界が自らの強さを問うのだから。

では、ギヌアが正面からラズーンにぶつからず、『泉の狩人（オーミノ）』を味方にしようとしたのも当然だ。ぶつかるのは、ラズーン崩壊か否かの瀬戸際、既に小競り合いをしている時期ではない。世界を継ぐに価する圧倒的な力を手に入れる必要があるのだから。

ギヌアがユーノを殺さずに手に入れようとしているのも、アシャへの復讐のためだけではなく、ユーノがラズーン崩壊を告げる因子ではないかと考え、自らの力の守り札としようとしたのかも知れない。いずれはユーノの血を流し、ユーノを生贄とすることで、ラズーン崩壊の時を世界に示したかっ

たのかも知れない。

(出遅れた)

恋なぞにうつつを抜かしているから、と舌打ちする。打てた手をみすみす見逃した気がしてひやりとした。

(ぐずぐずしてはいられない)

アシャはベッドから降り、旅支度を整えた。アギャン公の分領地を横切る、同じ道では、ギヌアに追いつくことはできないだろう。たとえ追いついたところで、ギヌア含む『運命(リメイン)』相手に行く手を阻むことができるかどうか危うい。

(『氷の双宮』を抜けて、『黒の流れ(デーヤ)』に沿って遡るしかないな)

懐かしい道、以前も慌ただしい出立だったが、今の状況を考えれば穏やかな部類だったと苦笑しながら、アシャは急ぎ足に部屋を出て行った。

「……」

ユーノはそろりとベッドから滑り降りた。

右肩の傷は動かしてもほとんど痛みを感じなくなっていた。

着ていた夜着を脱ぎ、自分用に仕立てられた白の短衣を着る。膝より少し上までの短衣、その上に、深い紺のチュニック、腰のあたりで白い紐を締める。上から体に巻き付ける布を手にも、ユーノは部屋を出た。

アシャから『氷の双宮』へ行くお知らせがあったのだ。

(いよいよ、謎が解ける)

ハイラカが受けたような説明で、納得するつもりはなかった。

ハイラカが『氷の双宮』で感じたという眠気は、おそらく人為的なものだろうと見当をつけている。その眠りの間に、洗礼を終わらせられるとともに、今ユーノがこれほど鮮明に覚えているラズーンの成り立ちも、多くの他の昔語りのようにあやふやな不思議な物語の一つとなってしまうのだろう。

その前に、何とかして『太皇(スーグ)』に疑問を突きつけ、答えを得る機会を掴みたい。

(それに)

回廊の窓からは、既に沈んだ陽が最後の残光を空に撒いているのが見えた。

(アシャのことを『太皇(スーグ)』に頼まなくてはならない)

どんなことでもしよう、この体で払える代償があるというなら、何としても払ってみせよう。

(だから、『太皇(スーグ)』)

憐れみをもって、アシャをセレドに、姉の夫としてお遣わし下さい。

幸福になるだろうことは、私が保証します。もし、代わりに残れとおっしゃるならば、このラズーンで命尽きるまでお仕えいたしましょう、アシャの指先ほどの価値もない命かも知れませんが。

(よし)

頭の中で願いを繰り返すと、心のどこかが鋭い痛みを訴えた。

嘘つき。

ののしることばも弔する。強く激しい糾弾となる。

それでいいのか。一度誓えば、その誓いこそ、二度とは破れないのだぞ。

(それでも、きっと)

嘘も死ぬまでつき通せば、真実になる。

ユーノはきゅっと唇を結んで、広間の入り口を潜った、とたん。

「っ」

リディノがアシャの首にしがみつき、頬に唇を寄せているのを見てしまって、思わず立ちすくむ。

「はい、アシャ兄さま！」

ちゅ、と小さな音をたてて、リディノは唇を離した。

「これが私の守り札よ。旅が無事に済みますように、アシャ兄さまが少しでも早くお帰りになりますように」

「旅...？」

「あ、ユーノ」

レスファートが振り返り走り寄ってくる。

広間の両端には夜だというのに、ミダス公配下の姿がずらりと並んでいた。『銀羽根』の姿も幾人か見え、シャイラもいる。

シャイラはなぜか奇妙に強張った表情でアシャを見つめている。

「アシャ、旅に出るの？」

「ああ」

アシャは振り返って、少し微笑った。

「ちょっと面倒事が持ち上がってな。お前を『氷の双宮』に送ったら、その足でラズーンを出る」

ラズーンの後継者がようやく国に戻ってきた、それをあれほど喜んで迎えた人々を置き去りにするようなことはもうするまい、ならば、言うようにそれほど大した用事ではないのかもしれない。だが、(それほど大したことでなければ、なぜ『アシャ』が出る?)

「どこへ？」

思わず問いかけていた。

アシャが微かに目を細める。紫色の瞳が一瞬間を宿すように暗くなる。

「すぐに戻るさ」

(嘘をついた...?)

「アシャ、」

「ユーノ！」

問いを重ねようとしたユーノは、いきなり腕を強く引っ張られて振り向いた。

「ぼくもキス！　ね、ユーノが早く帰ってきますように」

「あ、ああ」

屈み込んだユーノの頬に唇を当て、レスファートは何かを待つようにはにかみながら微笑んだ。

「ありがとう、レス。はい、お返し」

「ふふ」

少年の頬にキスを返して体を起こし、アシャを振り返る。だが、相手はミダス公と何か込み入った話をしている最中、向けている背中には取りつく島もない。

「ユーノ」

そのユーノに、今度はリディノが心配そうに近寄ってきた。

「無事に帰ってきてね」

「大丈夫だよ」

「だって、この前のこともあるし」

そっと顔を近づけてくるのに、頬を向ける。甘い香りとうるやかな感触が触れてすぐに離れた。

「あなたにも守りの札よ」

「ありがとう、リディ」

「僕も...」

リディノの後ろに立っていたハイラカがおずおずと近寄ってくる。ユーノがたじろいでいる間に素早く唇を頬に擦らせて、

「気をつけて」

優しい囁きを耳に吹き込んで、ハイラカは身を離れた。相手の照れくさそうな気配がこちらまで伝わってきて、少し頬が熱くなる。

「あ、ありがとう」

口ごもりながら俯いた。

「んじゃ、俺も」

イルファが喜々としてアシャの方へ足を踏み出す。

「おい、よせ！」

アシャがぎよっとした顔で身を引いた。

「ちえ」

「何がちえ、だ、何が」

沈んでいた広間はわっと明るい笑い声に包まれた。そうしてみると、ミダス公配下も、『銀羽根』も、動乱の中、頼みの綱のアシャが出て行くのが、どれほど重い影を落としているのかよくわかる。

(なのに、アシャを止めない、誰も)

むしろ、止めたいが止められない、そういう気配だ。

「じゃ、行くか、ユーノ」

「うん」

「お気をつけられますように」

ミダス公のことばに頷いて、ユーノとアシャは広間を出て行った。

ラズーンの中央部を囲む白い内壁は、いつかの夜のように厳然として聳え立っていた。扉は固く閉ざされていて、誰一人の侵入も許さない。

「よし、お帰り」

アシャは馬の背を叩いて合図した。辺りに漂う異様な気に怯えたのか、ユーノとアシャを乗せて来た馬は、すぐに向きを変えて去っていく。

「.....馬を使わないの？」

不思議に思って尋ねると、アシャは肩越しに視線を投げて苦笑した。

「馬で行けるような場所じゃない」

「さっき、どこへ行くか答えなかったね」

もう一度の問い、だが、アシャはなお応じない。そのまま扉に向き直って待つこと少し、やがて扉がきしみ音一つたてずにするすると開いていく。

「おいで」

アシャがこれほど問いに答えてくれないのは初めてだ。

(そんなに難しい問いをしているのか?)

それとも、それほど難しい仕事に出かけようとしているのか。

「...うん」

不安を抱えたまま、ユーノは先に立つアシャに続いて中に入った。

この前は、意識がないまま『氷の双宮』に来ていた。アシャはユーノの体の回復に、ラズーンにある特別な設備が必要だったのだ、と説明してくれたが、こうしてみると、特にそんな奇妙な建物がある様子はない。

人の気配があまりないのは、聖なる場所だからだろう。

眩いほどに白い石畳と、同じような白い石で造られた建物が、月光を反射しあって、辺りは壁の外よりかなり明るい。上からの光だけではなく、横から下から、淡い光が吹き上がり、押し寄せてくるようだ。

正面には、それこそ光そのもののような噴水がさらさらと音をたてている。というか、その音しか聞こえないほどだ。

静まり返った夜の静まり返った場所。

ユーノの視線は、噴水を巡る通路を辿って、少し先にある、鏡で映しあったようにそっくりな、向かい合った二つの建物に止まった。壁面には、逆巻き波打ち、今にもそこから溢れ出しそうな水流の浮き彫りで飾られている。

「あれが...『氷の双宮』なんだね?」

なんて、見事な浮き彫りだろう。

「生命の流れの象徴だ」

低く応じたアシャは、何か物思いにふけるように、じっとそれを見つめている。

(アシャ?)

わけのわからぬ不安が、再びユーノの心に過る。

(今日のアシャは変だ)

何かをずっと考えている。それが何か全く読めない。アシャの気持ちが表情からも姿からも読み取れない。

旅の空で、アシャがこういう気配になった時は、必ずラズーンに関わることは、アシャの正体に関わることだった。だが、今はもう、アシャがラズーンの正統後継者であることは知れているし、ラズーンが何をしているのかも大方掴めている。アシャがこんな風に沈黙を守ろうとする奥に、一体何があると言うのだろうか。

「どうした?」

聞きたい。

あなたがまだ抱えている秘密は一体何なのか、と。

(でも聞いてどうする)

脳裏を掠めたのはリディノがアシャに唇を寄せる場面、ふと上げた視線に、アシャがまっすぐ自分を見つめていたと気づいてどぎまぎして、目を逸らせる。

「ちょっと緊張しちゃって...」

くすり、とアシャが笑った。

「行かないの?」

「行くよ」

ユーノの促しに微笑んだまま歩き出す。ユーノも慌てて後を付き従っていく。

白い石畳を踏んで行くと、その足音がわずかな反響を呼び起こす。

「静かだね」

「ああ」

それだけで、沈黙がまた続いた。

近くに見えた『氷の双宮』はかなり歩いてようやく辿り着けた。見上げる偉容、圧倒する雰囲気はないが、簡単に足を踏み入れることができる気配でもない。

どちらからともなく立ち止まり、ユーノとアシャは見つめあった。

「...じゃあ」

「ああ」

「気をつけてね」

「わかっている」

素っ気ないアシャのことばに諦めて背中を向け、ユーノは階段を上がった。

ここから先は柱廊で、まっすぐ進んで行けば、今は入り組んだ柱に隠れて見えない『太皇(スーグ)』の玉座の前に出るはずだった。

一本目の柱までゆっくりと歩いていった時、

「ユーノ」

「え？」

振り返ると、アシャが悪戯っぽい笑いを浮かべながら、階段を上がってきていた。

「何？」

何か話し忘れただろうか。それとも、さっきの問いに答えてくれる気になったのか。数歩戻ったユーノに、アシャは目を細めた。

「お前は守り札をくれないのか？」

「え...だって...」

一気に頬に血が昇った。

「レスファートだってイルファだって、アシャに上げなかつただろ？」

「お前な」

アシャはむっつりした顔になった。

「男からもらって、何が嬉しい」

「へええ？」

久しぶりにきけた軽口が嬉しくなって笑った。

「私を女だって認めてくれるの？」

「お前は女だよ。自覚がなさ過ぎるがな」

「.....」

(急になんだ)

どきりとして口を噤んでしまった。慌ててうろたえたのを隠すように元気よく続ける。

「口がうまいんだから！」

「それに」

ユーノの混ぜ返しにアシャは少し笑みを消した。

「今度の旅には、少々守り札が欲しい」

「.....危険な旅なの？」

「...ああ」

今度はちゃんと応じてくれた。

「わかった」

アシャが屈み込む。ユーノは少し伸び上がって目を閉じ、頬に唇を当てた。

(どうか無事で帰ってきて...)

「えっ」

突然、体にアシャの腕が回って目を見開いた。抵抗する間もなく、アシャ、と呼ぼうとした唇を塞がれる。もがこうとしたのを嫌というほど抱き締められ、体中が熱くなった。

(アシャ、何、一体)

体を竦めると腕が緩んだ。怯えさせたのを謝るかのように、そっと唇が解放される。瞬間、ユーノの体のある感覚が走った。

(あの時の、包まれた感覚と、似てる)

眠り続けた夢の中、ユーノを誰かが抱き締め続けていたような気がしていた。どこへとも知れず落ち込んでいきそうな不安を、しっかりと抱えて守ってくれていた誰か。

(あれはまさか)

茫然として見上げるユーノを見下ろしていたアシャが、ふと笑み綻んだ。

「とっておきの守り札だな」

「っ、アシャっっ！」

(この人はどうしてこんな風に)

どこかが蕩けていきそうな熱を込めた声を出すんだろう。

そう感じた自分が何だかひどく恥ずかしくて、ユーノは思いつく限りの罵倒を並べようとした。

だがその時、どこから聞こえるというのでもない、孤管(クート)に似た音色の音律が漂ってきた。

(『太皇(スーグ)』！)

加熱していた頭が一気に冷める。同時に、自分を包んでいたアシャの腕がするりと解かれて、はっとして相手を振り仰いだ。

月光を浴びてきらきらと輝く金褐色の髪に縁取られた端整な顔、掠めていったのがレアナの優しく美しい微笑。

(ああ...そうだっけ...)

この人は、姉の想い人だったんだ。

(どうしていつも、忘れちゃう、のかな)

今更のように胸に沁みて、ユーノはそっと身を引いた。

「呼んでる……行かなきゃ」

「ああ」

アシャは引き止めることなく、両腕を広げた。

(やっぱり)

私のものじゃ、ないんだ。

「ってきます」

痛みが心に鮮烈な傷を刻み付ける。

ユーノはくるりと身を翻し、一歩、また一歩と、『氷の双宮』の中へ入り込んでいった。

進むに従って、孤管（クート）に似た柔らかな音は大きくなっていった。もっとも、辺りに響き渡るといふまではいかず、ふと気づけば周囲にいつもその音が鳴っているような、ある種の自然さで空間を満たしている。

いつ、その座についたのか、何歳ともわからぬ老人が玉座に座っていた。豊かな白髪に長く白い髭、ゆとりのある白い長衣をゆったりと体に巻きつけている。

「よく来たな、セレドのユーナ」

「仰せの通りに、『太皇（スーグ）』」

ユーノは『太皇（スーグ）』の前に跪いた。漂う旋律が甘さを増し、優しく体を包んで行く。その音色にうっとり聞き惚れそうになって、ユーノは我に返った。

「どうした？」

「いえ...」

「そなたには、既にラズーンの成り立ちを話していたな」

「はい...」

ユーノはぼんやりと答えた。頭の中に素朴で穏やかな音が忍び込んでいる。どこか遠い所から『太皇（スーグ）』の声が響いてくる。

「そなた、何か気づいたことがあるようじゃな」

「は...い」

ユーノは少し頭を振った。眠り込むのをかろうじて押しとどめ、『太皇（スーグ）』を見上げる。白衣に白い髭、白い髪が霞んで見える。

「私は、ラズーンの成り立ちについて、知識を得ております。けれども、それを考え、理解すればするほど、私にはわからないことがあります」

なぜか、口だけは滑らかに動いた。

「ほう...それは何じゃな？」

白い靄となった『太皇（スーグ）』が、静かに問いかけてくる。

「はい.....それは.....」

ゆっくり頭が垂れていくのに必死に抵抗しながら、ユーノは答えた。

来訪者が伝えの通りに素晴らしい力を持っていたなら、どうして二百年ごとの狂いをそのままにしておいたのか。

また、生命の再生までも試み、成し遂げることができた人々が、どうして『種の記憶（デーヌエー）』の狂いを予想できなかったのか。

ハイラカのラズーンの歴史の記憶と、ユーノの記憶は食い違っているのはなぜか。

疑問はまだある。

どうして『銀の王族』であるセレド皇族がカザドに狙われねばならないのか。『銀の王族』がユーノの理解した通りなら、そんなことは起こりえないはずだ。同様に、ユーノが『銀の王族』なら、襲われることも傷つけられることもなかったはず.....。

どんどん周囲の景色が滲んで曖昧になっていく。体が揺らめき、拝跪の姿勢を保ってられなくなってくる。

「それに...『創世の詩（うた）』にある『滅びを見こして.....生命（いのち）は紡がれ.....重ねられた』.....という.....くだ...りは.....」

限界だった。

ふわりと体が前にのめり、ユーノの意識はあっという間に闇に呑まれた。

昔。

神々の争いに心を傷めた一人の賢者がいた。

賢者はある人々と一緒に『氷の双宮』と後に呼ばれることになる小部屋を造り、神々の争いの果てに待つ滅亡を越えて、生命（いのち）を繋ごうとした。

研究の末、賢者はついに生命（いのち）の再生の理を解き明かした。なおも彼は有頂天で研究を進め、ついに満足のいく結果を得られるようになった。

だが、ある日、彼は恐ろしいことに気がついた。

生命（いのち）の再生の要とも言うべき『種の記憶（デーヌエー）』に、再生を繰り返すにつれて微細な狂いが生じてくるのだ。

それがどのような形になって現れてくるのかまではわからなかったが、形としての変形を生み出す

までは一つの『種の記憶（デーヌエー）』の使用で、約二百年後と推測された。

彼はうろたえ思い悩んだ。このままにしておけば、いずれ『種の記憶（デーヌエー）』は修復不可能なまでに歪み、生命（いのち）を繋ぐどころか、逆に小部屋こそがおぞましい生物を作り出す源となりかねない。

だが、賢者に残された時間はあまりにも少なく、神々の争いの先はあまりにも間近に迫っていた。

そこで、賢者は一つの結論を導き出した。

確かに、我々は生命（いのち）を次の世に引き継ごうとしている。

しかし、その生命（いのち）が次の世にふさわしいと、誰が証明できるのだろうか。

見るがいい。今、この世界において、ふさわしいはずの種であるこの生命（いのち）は、己の進んで来た大なる歩みを忘れ、己を育んだ自然を喰みつつあり、ここに至っては己の世界まで破滅に追いやろうとしている。

今でさえ、こんな生命（いのち）が、次の世に残ってよいと一体誰が言えよう。その判断を自然の中の一介の生命体が行ってよいものなのか。

今ここで、繋ごうとしているこの生命（いのち）は、次の世では悪なのかも知れない。生まれてきてはならなかったものとなるかもしれないのだ。

しかし、我々は既に、その歩みを始めてしまった。もう後戻りすることはできない。

それでは、と賢者は考えた。

私はあえて、この危惧については糊塗しよう。口を塞ぎ、目を閉じ、何も見なかった、だから何も言えないのだと、自分を欺き人を欺こう。そして、我らが繋いだ生命（いのち）の行き先は、運命の手に委ねよう。

或いは、我々から見れば歪んでいるとしか見えない『種の記憶（デーヌエー）』の再生による生命（いのち）こそが、次の世には相応しいのかも知れない。

賢者は口を噤んだ。

そして、その後起こった醜い争いの中で、一人口を噤んだまま死んでいったのだった。

『太皇（スーグ）』は『氷の双宮』の地下の部屋、五つの水槽が並ぶ部屋で、じっと水槽の一つに浮かんでいるユーノを見つめていた。

『狩人の山（オムニド）』に出かける直前のアシャのことを思い出す。

『ユーノのことを頼みます』

今まで女性の安否など気にしたこともなかった男が、真剣な面持ちで訴えた。

『もし、私に何事かあるようなら、無事セレドに戻れるようにお計らい下さい』

それから、と珍しくはにかんだような微笑を浮かべて、

『この動乱に何らかの解決が付き、平和が戻りましたら、再びラズーンを出る事をお許し下さい』

『どうしてだ？』

『.....受け入れられるかどうかはわかりませんが』

アシャは声を低めた。

『私はユーノと共にありたいのです...できることなら未来永劫、側に。彼女はセレドの第二皇女ですし、父母の許しなしにラズーンに留まることは納得しないでしょう。セレドでユーノとユーノの父母に、共に生きる許しを得たいと思います』

『...叶わなければ？』

『.....叶わなければ』

しっかりと見上げてきた瞳は、今まで見たことがない切実さに溢れていた。

『ラズーンに戻り、この国の礎として身を尽くします』

それが世界を落ち着かせ、ユーノを守ることに繋がるのだから。

小さく続けた囁きを繰り返されるのを恐れたように、アシャはすぐさま立ち上がり、『狩人の山（オムニド）』へと旅立った。

（あのアシャが、な）

苦笑しながら思い返す。数々の美姫の誘い、諸国からの依頼、その才能と美貌を望まぬ者などいなかったのに、誰に心開くこともなく、どの国に居場所を見いだすこともなく、ラズーンさえ離れることしか考えない孤独な魂が、何をもってこの娘にあれほどの想いを寄せるに至ったのか、そう思っていた、だが。

（無理もあるまい）

ユーノの心へ直接様々な問いかけを投げ、数々の答えを引き出した今なら、『太皇（スーグ）』もまた、ユーノの底に流れる激しい優しさに引き寄せられる。

己の全てを投げ出しても、愛しい者を守ろうとする情熱は、これまでどんなに心優しい『銀の王族』にも見られなかった。アシャの回りにいた女性達は、守られてこそ自らの幸福と考えており、守られ

ずとも一人立つ、ましてや、アシャを守ろうとするような娘など存在しなかった。

(さて不思議な娘よ)

荒々しい戦士の魂を抱いて一人闇に立ち向かうかと思えば、アシャへの想いを、ささやかな劣等感と姉への思いやりで打ち明けられぬまま心震わせる。レスファートという少年を抱き締めるためなら、どんな哀しみも苦しみも押し殺せるほどの強さを持ちながら、相対する敵の傷みまで時には感じ取り、傷つく仲間の身代わりになろうとする優しさを持ち合わせる。

(剣士の魂と少女の想いと)

その二つがこれほど見事に一人の少女に結晶するのか、と感嘆する。

(人とは無限の可能性を持つ)

限りなく強く、限りなく優しく、限りなく大きく、限りなく豊かに、そう願いつけるのは欲望の形、それらを満たそうとして、人は常に新たな形を自らの内から生み出していくものなのだろう。

『太皇(スーグ)』は水槽の中でラズーンの真の意味、隠された存在の意義を学び続けているユーノを見つめた。

人の理解出来る範囲を越えた多くの事柄を、使われていなかった『種の記憶(デーヌエー)』の領域に刻み込んでいくこと……そうすることで、次に集められた時に必要とされる情報の器を準備しておくこと、それこそが『銀の王族』の洗礼だ。

それを負担と感じる『銀の王族』は、時にお伽噺にすり替え、時に自らの記憶を封印し、それらが叶わない時は心を閉ざして膨大な情報を認識しないようにすることで、自分を守り、無事に故郷に戻っていくのだが。

同じことは資質を認められた正統後継者候補にも行われる。ごく少数だけが、その情報を認識したまま覚醒し、ラズーンが支える重く不安定な日常を負える存在となる。

(もし、この娘がそれを成し遂げたなら)

『太皇(スーグ)』は目を細めた。

「『銀の王族』の正統後継者ができるということか…?」

ユーノならば耐えきれぬかも知れない、ラズーンが単なる政治的な統合府ではなく、この世界の生命(いのち)をも支える役割を担っているという現実には。

「それもまた、動乱のこの期にふさわしい出来事だ」

『太皇(スーグ)』は静かに呟いた。

そして、小部屋の最後の一人が、奇しくも賢者と同じように運命の手による判断を選んだ後、やってきた来訪者は、小部屋の持つ機能と隠されていた意図を全て理解した。そして、深い同情のもとに、賢者の意志を継ぎ、彼が整え切れなかった部分を補完した。

一人の人間を小部屋の管理者として選び、『太皇(スーグ)』とする。この『太皇(スーグ)』にラズーン創世を教えるとともに、次代の『太皇(スーグ)』を選ぶ方法も教える。

その資質は、ラズーンという都は滅びるために存在する、という隠された意図に気づくということ。ラズーンは既に一度失われた世界の残像だ。

そこには本来の再生の目的以外に、生命(いのち)への大いなる賭けがあった。

二百年毎に揺らぐ生命形態を必死の努力で保っていても、それはある時意味を為さなくなる。いくら『銀の王族』の情報を入れ替えようとも、『種の記憶(デーヌエー)』は歪み続け、いずれ再生の力は全て失われる。

しかも、それは予定されていたことだ。一度、人が自らの手にした生命(いのち)の繋がりを、再び自然に返すために。

そうすることによって初めて、再生されてきた生命(いのち)は、その世界の真の生命(いのち)として根付くだろう。そこには、失われた世界とは全く違う、けれど生き生きと生命力に溢れた世界が生まれるだろう。

それこそが、真の意味での創世であり、生命(いのち)を繋いだ証であった。

或いは、ラズーンが再生能力を失った時点で、回復しかけた世界は再び衰退し、生命(いのち)は消え失せていってしまうかも知れない。

しかし、そこから先は、既に一生命体の手が加わるべきではないこと、生命(いのち)の最も神聖な、侵すべからざるところ………言わば、賢者は、ラズーンの滅亡時に賭けたのだ。

自分達の試みが単なる実験で終わるのではなく、厳しくも豊かな運命の手によって、真の創世を作り出し歩み出すことを、繋いだ生命(いのち)の子孫に賭けた。

そして、来訪者はそれを導くべく、予言を生み出し、世を整えた。

来るべき時に備えて、物事は着々と進む。

『種の記憶(デーヌエー)』の歪みが大きくなっていく。それに合わせて、設備は『銀の王族』に対する条件づけを減らし始める。条件づけがあまりされていない人々は、『銀の王族』に対する対応

を変え始め、周囲も影響を受けて、『銀の王族』は保護と特権を失い始める。諸国は動乱の時期に入り、『銀の王族』も巻き込まれ、彼らの間に時代への目覚めが生まれ始める。

一方ラズーンは歪みを直すべく、『銀の王族』を集め、『氷の双宮』の記憶の修正をはかるが、既に設備の働きは変化しつつあり、いつもの二百年祭と違って、太古生物と『運命（リマイン）』の復活はおさまらない。

ついに、この世界での生存権を巡って、ラズーン側と『運命（リマイン）』側の対立が起こるようになり、その勝者がこの世界に根付く生命（いのち）となる。

それが、人の目論みと運命の手が膨大な時間をかけて織りなそうとした、世界復活の筋道だ。

「う...ん...」

うめき声に、『太皇（スーグ）』はベッドで眠っているユーノを見やり、まだ目を覚ましていないのを知って、静かに微笑んだ。

洗礼の後は誰もが極度の疲労状態に陥る。だが、ユーノは、何の予備知識もないところにラズーンの創世から隠された意図まで叩き込んだにしては、穏やかに眠り続けていた。

「ラズーンか...」

『太皇（スーグ）』は重く深い溜め息をついて、傍らの立風琴（リュシ）を取り上げた。数年来弾くこともなかった。だが、それでも弾くと澄んだ音がした。

「こは創世の詩（うた）

もう一つの白き面（おもて）

人の語らぬ創世の詩（うた）

彼の夜（よ）

星の降り立つ夜（よ）

その夜過ぎこし

はるか昔

東西の神々の戦いに

世をつながんと空しき望み

生命（いのち）重ねる宮の者

しかしてあわれ

知るよしもなし

生命（いのち）重ねるその果てに

まつ絶望のおそろしさ

宮にこもりし者どもあわれ

あわれと思えど術（すべ）はなし

ついに狂いて

身を滅ぼしぬ

深き闇よ

嘆きの夜よ

あわれかな

あわれかな

滅びはすでに

予見されたと

古き伝えは語りつぐ

滅びを見こして

生命（いのち）はつむがれ

重ねられたとは

詩人（うたびと）のことば...」

しわがれ掠れた声が、深い憂いを帯びていた。哀調をいやがうえにも増して、固く冷たい『氷の双宮』に響く。

「人の命ははかなし

しかして

人の造る命はなおはかなし

古き伝えの祈りのことば

天に生まれ

地に育ち
緑はぐくむ命の糧は
人の手にてははぐくみがたし
そはいつか
二度と命をつなげまい
おそれが賢者を導く
沈黙の岩戸へ
深き湖の底へ
かくして
賢者、口をおおいぬ
定められた日来たるまで
すべての罪は我にあり
大いなる自然に叫びつつ

かくして
ラズーン
二百年の祭りの定めを背負いたり
その定めのある限り
賢者の悲しみ
消えることなき、夜の果て
伝えは語りぬ
はるかな未来.....」

ここは滅びていくのだ、と『太皇（スーグ）』は胸を締め付けられるような想いを味わった。二百年の間、住み慣れて来た『氷の双宮』もまた。

立風琴（リュシ）を鳴らす手に力が籠る。

「ラズーンは
失われた都
枯れた泉
死して飛ばぬ人の夢
すべての栄えがさもあるように
永遠に続く栄えはない
いつしか
美しきこの都も
朽ち果て
大地の上に横たわらん
しかし、世は続く
人の命は続く...」
続くのはラズーンか、それとも『運命（リマイン）』なのか。

「死が人の運命なら
生も又人の運命
ラズーンは滅び
失われた都となる
『運命（リマイン）』は跳梁し
闇は人々の心に巣食い
動乱は世を暗くする

滅びは定め
世の始め
星の降り立ちし夜より
ラズーンの祭は
その身に課せられてあり.....」

『太皇（スーグ）』は傍らに眠るユーノを見つめ、『泉の狩人（オーミノ）』の所へ急ぐアシャを思った。

彼らはまるで、今動きつつある天秤の両側にそれぞれ座しているようにも思えた。人と人以外の存在
とが、どちらか片方がではなくて、互いに釣り合うという微かな希望のような。

（幻のような、願い...）

目を閉じて、最後の章を詩い上げる。

「しかし

再び創世の時は来たり

その時

世は人の命を紡ぎ

人は命の綾を織りなし

手をつなぎ

心を結び

慈しみあい

愛しあい

命の綾は世を生まれ続けさせるのだ……」

(詩(うた)……?)

眠りの中で、ユーノはぼんやりと呟いた。

どこかで聞いたことのある詩(うた)だ。一体いつのことだっただろう。

だが、疲れ切っている心は、そこまで考えるので精一杯だった。

淡い泡のような思考は柔らかな波に散らされ、崩され、ユーノはより深い眠りの闇をただただ漂い続けていた。

第四部へつづく